
ガールズトークRPG エピソード2/散歩するピラミッドと黄金の爪垢

加茂正路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガールズトークRPG エピソード2 / 散歩するピラミッドと黄金の爪垢

【Nコード】

N1913X

【作者名】

加茂正路

【あらすじ】

魔王を倒したのに、今度は『大魔王』を倒すことになったわたし達に最大の敵が立ちはだかる！ それは『マナー』だ。城が全壊したぐらいでビターセント出してくれなかった王様を恨みつつ、わたし達一行はギャンブラーの聖地と称される《ラスゼガス》で軍資金を稼ごうと画策する。いや、ギャンブルはやめとけて……。

？・三十秒で分かる前回のあらすじ

タイトル 『わたし勇者』
著 勇者

わたし

勇者

体重？

よんじゅ……ひみつ！

彼女？

いえ

女ですから

でも

『おとこ』ですから
みたいな

魔王を倒すため
旅に出た

風の精霊

エロかった

ので

フルボッコにしてやったり！

嵐の精霊王

一度は敗北した

けど

ペシャンコにしてやったり！
みたいな

魔王

倒しましたとも

戦士と

僧侶ちゃんと

マホツカと

みんなで力を合わせて

みたいな

そして世界は

平和になった

おしまい

「こ・ん・な・ん・で分かるかー！」

「そんなッ……バカな……ッ!？」

ガタ、ゴトと不規則に揺れる車内にて、マホツカが落雷のごとく憤慨する。

わたし達はカリメア大陸横断鉄道の寝台車両の一室にいた。二等寝台の四人部屋で、サービスは一切なし。まあ、贅沢はラスボスだからね。

目的地の《ラスゼガス》まで時間があるので、マホツカの提案で、魔王を倒すまでの経緯を小説として活字に起こすことにしてみたのだ。

さっそくわたしが、トロールもタップダンスをするであろう躍動した文章を書き上げた——のだけど、編集長マホツカに怒られた。なぜだ？

「何堂々とパクってんのよ！ しかもあんな駄文を！」

「ええー、読みやすくていいじゃん」

《ぼくは彼氏》——数年前に一世を風靡した恋愛小説。『男の子の全てがここに濃縮してある！ みたいな』なキャッチフレーズで、シンヨーク中の女の子が、男子の気持ちを理解するために読み耽った名（迷？）作だ。その奇抜な文体を真似してみたんだけど、ちょっと地の文が少なくて説明不足だったかな？

「少ないじゃなくて『皆無』でしょーが！」

むむむ、でも模倣は独創の母って言うし。

「はあ、勇者も意外とミイハーねえ」

そりゃまあ、一応『女子』ですから（キリッ！）。

「ん……ん？ 何しているんですか、お二人とも？」

「あ、ごめん僧侶ちゃん。起こしちゃった？」

人生初の寝台列車に浮かれて夜更かししてしまった昨晚。徹夜など縁のない僧侶ちゃんはすっかり熟睡中だったのに起こしてしまった。あゝ僧侶ちゃんの寝顔は激かわいかったな。けれど寝癖をつけて眠りまなこでとろろんとする姿はもっとヤバイ！ 発狂して虎になりそう！

「まったく、この駄作はゴミ箱に直行ね。メモリの無駄だし、ポチっとな」

「うそっ、消しちゃうの！」

マホツカはアルフォンの『消去』と表示されたボタンを無情にも押した。わたしの傑作が一瞬にして——灰をスキップして——墓場逝きとなった。鬼編集長だ、血も涙もない。

「ううう、せつかく書いたのに……」

「あんな昔流行ったのを今時書いたら、苦笑されるか不燃物扱いされるかのどっちかなのよ。次はオリジナルの文体で書きなさい」

そんなこと言われましても、わたしに文才なんてないし。

それにあのタッチしながら文字を書くのってすごく疲れるんですけど。間違えて別の文字が入力されるのがほんとイライラしまくった。

僧侶ちゃんは髪を梳き、マホツカがアルフォンの新着ニュースを

読み、わたしは次回作のネタ出しを考えていると、突如窓の外が明るくなった。

「うわぁお、地平線だ」

州境の長いトンネルを抜けると――砂漠だった。獣一匹棲息していない極暑の地である。

太陽が燦々^{きらきら}と輝いていた。怒った顔して突進してきそうな雰囲気である。

「もう少しで到着するみたいだな」

スライド式のドアが開くと、朝の鍛錬に出かけていた戦士が首にタオルを巻いた格好で戻ってきた。狭い列車のどこに鍛錬する場所があったの？

《ヌバダシティ》の最大都市であるラスゼガスは、砂漠のと真ん中に築かれたオアシスの街である。その昔、《ゴールドゴーレム》が大量繁殖した時代に、前線基地として重宝されたのが起源だった。

今では世界有数のカジノの都として、世界中から観光客や一攫千金を狙ったギブソンさんと、ブラックジャックで一山当てようとする暗記の得意な学生達が集う。

「とうとう着くんだな」

「そうですね。ギャンブラーの聖地に」

「ふふん、キャビアとドンペリ用意して待ってなさいよ」

みんなして眼光鋭く街がある方向を窓越しに眺めている。何か怖いんですけど……。

それもそのはず、ゼガスでの目的は観光ではなく、さらに精霊や精霊王とかましてや大魔王とかとは全く関係のない用事なのだ。

すなわち『金』^{マネー}である。

大魔王討伐のため、世界中を旅するための資金をカジノで稼ぐために訪れたのだ。

お城がほぼ全壊したぐらいでビターセント王様が出してくれなかったから、こんな寄り道をわざわざする羽目になったのである。

「まあ、これも旅の良い思い出になるかな」

しかし、どうしても嫌な予感しかないのはなぜだろう、そしてなぜだろう……。

？・オアシスの街

「デッか!!」

ホワイストーンのビルディングは、青と緑がオアシスを連想させる噴水広場の南側に建っていた。飛沫ひまつを上げる噴水よりも、その最上階は遥かに高く、横の長さはクラーケンの魚(?) 拓といい勝負ができそうである。

赤い壁ならぬ白い壁が、わたし達を見下ろすように待ち構えていたのだった。

ラスゼガスに列車が到着した頃には、わたしの原稿はボツの山を築き…… じゃなくって、お昼近くになっていたので、まずは適当な飲食店で腹ごしらえをすることにした。

東西豊富なバリエーションのメニューが揃う瀟洒しょうしゃなレストランで、わたしと僧侶ちゃんはスパゲッティを、戦士とマホツカはライス物を注文した。観光客で賑わう街だけあって、バブリーなぐらいのお値段ばったくり…… じゃなくって、外来客の舌を満足させるすばらしい味だった。

昼食ついでに、どこのカジノを今宵の戦場とするか話し合うことにした。わたしと戦士は知識ゼロ、僧侶ちゃんはどこか遠慮がちな姿勢だったので、結局はマホツカが提案したゼガスで一番力モ料理が美味しいと有名な…… じゃなくって、景気の良い店となった。

満場一致で目的のカジノへ下見に行こうと地図を確認しようとしたとき、僧侶ちゃんが場所を知っている(ホワイ?) と言ったので、こうして最短ルートでマネーコロシアムへと赴いたわけなんですけど、

「これがカジノなのか……。シンヨーク城以上の大きさだな」

「そうですね。私も初めて訪れましたけど、これほどとは」

「いーじゃんいーじゃん。ワタシたちを客と迎えるに相応しい店ね」
とにかく圧倒される巨大さだった。さすがは百店舗近くカジノ場

があるゼガスで、堂々のナンバーワンを勝ち取っている店とのことである。

だがしかし、それだけこの店でお金をスツた人がたくさんいるということになる。ビルの建材には、きつと夢追い人の悲嘆と絶望と怨念が含まれているに違いない。世の中とは真に無情である。ギオンシヨージヤの鐘の音が聞こえてきそうだ、字は違うけど。

さて、わたし達は店のエントランス前にいるわけだけど、まだ入店はしない。ここ《コルツネオ》は、二十四時間営業のお店なんだけど、正装もしくは正装に近い服を着用しなければ門前払いされると僧侶ちゃんの解説。エントランスをラフな格好の人が頻繁に出入りしているが、それはこのお店がホテルを兼業しているから（さらにテナントでレストランが二軒入っている）との僧侶ちゃんの講説これだけ高くて広い建物の地上部分は、なんとホテルとレストランのスペースで、本業のカジノ場は地下にあるという僧侶ちゃんの熱のこもった力説には二つの意味で驚いた。僧侶ちゃん詳しいね、まるで取説とりせつのようだ。

ところで、わたし達は四人揃って未成年なのだけど、ギャンブルの街であるゼガスには未成年入店禁止という甘っちょろいルールは存在しない。ので然るべき服装で来店すれば、初等学校に通うハナタレ小僧でもスロットマシンを回せるのだ。

それに加えて、ヌバシティの州律はお金に関してかなりユルイため、気を抜くとスリに遭ったわけでもないのに財布が空になっっているというから恐ろしい。武器屋防具屋などは、昼と夜と店員の気分で値段が変動するらしい。

全く持って、何につけても油断できない街である。

「ついに私の運を鍛えるべき時がきたのか……」

「ディーラーさんやウェイトレスさんのチップを用意しておかないと……」

「やっぱブラックジャックが一番儲けやすいかしら。それとも……」
みんな思考がダダ漏れしているけど大丈夫かな？

「しかしカジノですか」。母の話が本当なら、前勇者であり我が不肖の父は魔王討伐の旅で貯めた資金を全てカジノに寄付しているからな。そのリベンジとなるか、はたまたミイラ取りがソンビになるか。

それはそうと、

「いつまでも店の前にいたら邪魔になるから、とりあえず宿屋を探そう」

正装に着替える必要もあるけど、寝る場所の確保も重要だ。またメリガンシテイみたいに激安宿屋ないかな、全国展開してないっすかね？

「ふふん、すでにいい宿屋見つけてあるわよ。しかもここからすぐ近く」

さっすがマホツカ先生。ありがたや、ありがたや。

と、わたし達が宿屋へ行こうと白い壁に背を向けたとき、黒塗りの客車が付いた二頭馬車が広場の前で止まった。御者がわざわざ客車のドアを開けると、白髪とスーツで固めた年配の人が出てきた。腰は曲がっていなかったけど、鷹の金細工が取り付けられた杖をつき、傍らには黒服でガタイのいいボディガードを二人伴っていた。いかにもフアザーな感じの人だ、愛のテーマと太い葉巻がとても似合いそうである。

こういう人とはあまり関わらない方が人生を安穩と過ごすためのコツだと瞬時に脳から命令が下り、道を譲る（逃げる）ように移動した——んだけど、なぜかご老人は足を止めると、こちらを見て……

「……」

え？ 何だろう、驚愕な表情で目を見開いているんですけど。

「おい、そこのお前達」

しゃがれた声は明らかにわたし達に向けられていた。

なぜだ？ わたしは今回何もしていませんよ！？

コツコツと杖で地面を叩きながら歩み寄ってきた老人は、臆する

わたしを——ではなく、僧侶ちゃんを見つめていた。え、まさか口――、

「その僧侶、そのロザリオをどこで手に入れた！」

ロザリオ？ 僧侶ちゃんが装備している装飾品のことですか？

そういえばいつも大事そうに首から提げているよね。名称も確か『形見』ってなっていたはず。

「え？ これですか？ これは……」

怪しいおじさんに睨み付けられても僧侶ちゃんは落ち着いていた。さすがは僧侶ちゃんだ、わたし達パーティーの中で一番大人かもしれない。

エルメ・クロスのロゴマークではなく正真正銘の銀製の十字架を手に乗せる僧侶ちゃんと、それを見極めようと顔を近づけるおじさんの間に、一番子供なマホツカが立ちふさがる。

「ちよつとちよつと、何よオツサン。何か用があるわけ？」

ずいっと、マホツカが不審なおじさんにガンを飛ばす。戦士も僧侶ちゃんを庇うように前へ一歩出た。この二人がいれば、ジェットとシャークが縄張り争いを繰り広げる西側街も、大手を振って闊歩できそうだ。

までまで、わたし一人だけ傍観しているわけにはいかない！ 僧侶ちゃんに難癖つけるような輩はたとえ神様であっても許さん！

ここはガツンと何か言わなければ――、

「ああの、なな何か御用でしょうか？」

って滅茶苦茶ビビってるよわたし！

やつぱ無理です。それにご老人は労わらないとね（言い訳）。

「……………ふん、まあいい」

わたし達の威圧に屈したのか、老人は興味を失くしたかのように、それだけ言い残すと、ボディガードを顎で促して立ち去っていった。何だったのいったい？ あれ、お店に入ってしまった。

「随分と不躰な態度だったな」

「ふん、ただのボケたオツサンでしょ。いちいち相手してたら加齢

臭^{うっ}が感染^{うっ}るわ」

相変わらず辛口評価のマホツカである。

とりあえず何も起きなくてよかった。わたし達の旅もそんなに暇ではない（はず）、きっと二度会うこともないだろう。

「僧侶ちゃん大丈夫？」

「ええ、はい。何かされたわけではないですから」

神聖で敬虔^{けいけん}な僧侶^{けいけん}ちゃんに汚い指一本でも触れたら、わたしはそいつが泣くまでデコピンを止めない！

ああ、娘さんを持つお父さんの気持ちが分かってきたかも。

そういえば、わたしも一人娘のはずなんだけどな。ま、いつか。

？・ドレスアップ！

なぜだ？

ああ、わたしはこのセリフを何回言わなくてはならないのか。しかし、それでもこの状況で言わないでいられるのか？ 否、言わなければならない！

「なぜだ！？」

まずはビシッと、アイロンの決まったシワ一つない白のシャツ。つぎにサラッと、手触りの良い上質な黒のベスト。

そしてシメツと、アクセントとして赤の蝶ネクタイ。

これで穴だらけの高級腕時計を装備すれば完璧に違いない。

「よくお似合いですよ、お客様」

着替え室から出ると、店員さんがマーベラスな営業スマイルでお迎えしてくれた。

《旅立つ人の服》などというパチ物を脱ぎ捨て、男なら誰もが憧れるフォーマルスタイルとなったわたし。店員さんもわたしの姿に思わず魅了されたに違いない……………って、わたしは女なんですけど！

大きな姿身の前で改めて自分の身なりを確認する。肩幅なんて広いわけじゃないんだから、別にそこまで似合っていないでしょ？ 髪の毛はワックスでバリバリに固めちゃってるし。もう何だよこれ、大道芸人か？ チンドン屋か？

「いつてらっしゃいませ」

腰を四十五度に曲げる丁寧なお辞儀姿に見送られ、とりあえずわたしはみんなとの待ち合わせ場所へと急いだ。

ここはラス Vegas にあるレンタル服屋である。カジノ場へ入るためにはスーツかドレスじゃないと駄目なので、こうして店で借りることにしたのだ。節約、節約！

それで、どうしてわたしは男性の衣装を着ているのかというと、店内のドレスコーナーへ足を踏み入れた瞬間「お客様はあちらです

よ」と、強制的に紳士服コーナーへしよつぴかれ、有無を述べる前に試着室へと放り込まれたのだ。

「まあ、こっちの方が微妙にレンタル料金安いから、いっか」節約、節約？

それにいざというときに動きやすいからね。

と、無理やり自分を納得させる。旅立って一週間ちよいであるが、だいぶ扱いに慣れてきてしまっている気がする。いいのか、これで？

「それにしても、みんなまだかな？」

女の着替えと化粧は長いから巻かれろって言うからね。わたしは髪を固めるてんぷるしただけで、化粧の類など一切しなかった。簡素だな。

「何だ、まだ勇者だけか」

ガラス張りになっっている壁から沈む夕日を眺めていると、戦士の声が掛けられた。

「えっ、戦……士？」

声の方を振り向くと（よくわたしって分かったよね）、そこにはベルベツトレッドのイブニングドレスを着たあでやかな女性が、スラリと背筋を伸ばして立っていた。つややかな長い黒髪がアッジアンティストの香りを漂わせる。

「す、すごく綺麗……」

「え、あっ、そうか？ 何だか恥ずかしい気もするが」
顔を紅潮させる戦士。いや、まじグツドですよ！

高身長に加えてヒールの高い銀革の靴。大人びた色香を醸し出す戦士は、とてもわたしと歳が一つしか変わらないと思えない。周囲の男性客も、珍しい黒髪美女に目を奪われている。

がしかーし。その理由はもう一つあった。

「何で剣を提げてるの？」

ドレスには決して組み合わせることのない鋼の剣が、剣帯と共に腰から吊ってあった。ミスマツチ過ぎるでしょ、それ。

「こいつだけは手放せなくてな」

まあ、そんなに大事な一品なら文句は言えないけどさ……。

「たとえ街中でも丸腰は危険だ。念のためドレスの下には短剣を隠してある」

どこのスパイだよ！

ああ、でもいいなー。わたしもこんな大人な女性になりたいな。でもその前に『おとこ』をどーにかしないとイケないんだけど、性別設定変更アイテムとかってないの？

「ところで勇者。一つ質問したいことがあるのだが……」

「ん？ なに——」

「お待たせしました。勇者さん、戦士さん」

何か言いたげな戦士であったが、着替えを済ませた僧侶ちゃんが現れたので、口をつぐんだ。

さて、素朴な法衣姿でも女神なオーラを放つ僧侶ちゃんのドレス姿とは——、

「ドレスは久しぶりなので、少し手間取ってしまいました」

！！　そ、そ、そ、そ、僧侶ちゃん！？

「似合うでしょうか？」

うひゃあああああああああああああくあいああいいいいきよ僧侶ちゃんまじかわいいいいいいああいいよマジ天使だよよあああああどうなってんんんだよこれはもうかみさまとかいらないううううううううりよちゃんだけでいいよよよ。

「だ、大丈夫か勇者？　いきなり倒れたりして」

「うげっ、ぐはっ、だ、大丈夫」

ヤバイ！　ヤバスグル！！　時間が、僧侶ちゃんのあまりの可愛さにわたしの時間が奪われた。何を言っているのか分からないかもしれないけど、それだけの破壊力がそこにはあった。

いやさ、別に普通のフリルのドレスなんだけど、ちゅ、ちゅ、ちゅ、チューブトップって、トップって！　ナマ足様もさいっこのんですけど、ナマ鎖骨様がまじやべーよ！　どうなってんだよこの

光景！ 極楽浄土か！？ 竜宮城か！？

セミロングの金髪をツインテールのアップにしてあるのも、キャー！ ！ もう駄目だ、目が、目がー！ー！！

僧侶ちゃんをこの姿にドレスチェンジしてくれた店員さんは、そのあまりの神々しい御身に失神したに違いない。わたしももう無理、精神体が分離しそう。

「あとはマホツカだけか」

「そうみたいです。どんな服を選んだのか楽しみです」

マホツカのことだから店員さんそっちのけでギャーギャー騒いでいるのかもしれない。ちよつと様子でも見に行こうかな。

「あ、あの勇者さん。お訊ねしたいことがあるんですけど……」

「ん？ なに僧侶ちゃん？」あり、何かデジャブだな。

「えつと、その服装なんですけど——」

「おつまたせー」

何か言おうとした僧侶ちゃんだったけど、ようやくにしてマホツカが現れたため、静かに口をつぐんだ。

さて、露出を好まないマホツカが選ぶドレス姿とはいいたい——、

「いやー、なかなかいい色のなかったのよねー」

？

「ん？」これはわたし。

「お？」これは戦士。

「え？」これは僧侶ちゃん。

「何よ、三人して同じ目しちやって」

いや、だつてさ。

「どうしていつもと同じ格好なの？ ドレスは？」

がいせんしょうくん

凱旋將軍な様子で合流したマホツカは、いつものとんがり帽子にいつもの黒のローブ姿のままだった。いったい何に時間をかけたのだろう。化粧も特になっているわけでもなさそうだし。プレートのごートを通れなかったとか？

「はあ？ 同じじゃないでしょーが。よく見なさい、よ・く！」

いや、よく見ると言われましても。

「同じ……じゃん」

「同じ……だな」

「同じ……ですね」

三人揃って同じ感想。よって同じだ。証・明・完・了！

「まったく、これだからトーシロは。ローブの色が違うじゃない」
え、そうなの？

確かによー……………く見ると、微妙に濃さが違うような気がしないでもないような気分だと思いかもしれない。

「でもさ、何で黒色のローブなわけ？」

もしかして魔法使い（女性）は、黒いローブを常時装備してないと駄目なしきたりがあるとか？ でも昔、紙芝居で見た《魔女の宅配便》では紫色のローブの女の子もいたよね。あれは正直センスを疑ったけど。

「いいでしょ別に、ワタシの自由なんだし。あくまでも『正装に近い服装』でいいんだから」

まあ、カジノに入場できるのならそれでもいいけどさ。

しかし、なぜ同じ黒いローブなのに一番時間を要したんだろうね。それにとんがり帽子はいつも装備している古ぼけたやつのままだし。そっちは変えないんだ。

うゝむ、ちよつとは楽しみにしていたんだけどな。

まあ、何はともあれ、これで準備万端だ。

「じゃあ、《コルツネオ》のカジノヘレッツらゴー！」

わたしはカジノへの第一歩を踏み出した。どうして負けると分かっているのにカジノへ行くのかって？ ふっ、それは、そこにカジノがあるから――、

「ねえ、勇者」

ん？ マホツカが、なぜか珍しい生き物を見るかのような視線を飛ばしてくる。

「何？ 忘れ物？」

「そーじゃないわよ。アンタどうしてベストに蝶ネクタイ姿なのよ？」

左右には同じ表情の戦士と僧侶ちゃん。

「その服装だとディーラーさんかボーイさんと間違われますよ」

「まあ、チップはもらえるかもしれないが」

……………。

「も、もちろん気付いてましたとも！ ただ何と言いますか、試しにちよこつと着てみただけだよ。敵を知るにはまず郷に従むによ」

「嘘をつくでない嘘を」

「すみません。とりあえずスーツっぽい感じなら何でも大丈夫かと思っていました。」

結局着替え直す羽目になり、わたしが一番時間をくった。

「そういえば、スーツであることへのツツコミはないんだ……………、なぜだ！？」

？・遊び人の理想郷（コロシム）

太陽が砂平線へと沈み、夜の帳が街を覆いつくすと、ライトに彩られた舞台の幕が開けた。わたし達は金と欲望が混在した、混沌と混沌の地へと足を踏み入れた。

そこそこ大人な喫茶店には一人で入れる勇氣はあるけれど、さすがにカジノへはみんながいなければ無理だったかな。高級ブティックとは属性の違う入りづらさがここにはある。

「ここが地下なのか。信じられん広さだな」

「平日なのに、人がいっぱいですね」

「ほんと、暇人はどこの街にもいるわよね」

陽気なBGMが流れるカジノ場には、ダンディーな紳士からエレガントな淑女まで、老若男女遊び人がたくさんいた。地下だというのは、目が痛くなるほど大量の照明が乱反射され、客たちの欲心をかき立てている。

スロットマシンが奏でる奇跡のワルツ、ルーレットがかき鳴らす波乱のロンド、コインが弾ずる魅惑の不協和音が、人々の喧騒と混ざって場内へと響き渡っていた。

「耳が痛くなる……」

「この騒音も修行の一環だと思えばいいのか。心頭滅却すれば雑音もまた福音……」

いや、無理でしょ。

「ふふん、この音が軽快な16ビートに聞こえないうちは、まだまだだよ」

そういうもんですかね。ん？　なぜか僧侶ちゃんがこくりと頷いたような気がしたけど……見間違いだろう。

とりあえず、四人で入り口付近をたむろしていても通行の邪魔になるだけだ。二十四時間営業とはいえ、さすがに日付をまたいでまでここにいたるつもりはない。

「戦士はどうするの？」

運を鍛えるなどという餅を絵に描く戦士。もうここまできたら本人の自由にさせてあげよう。そして現実を熱いうちに喉へ通してくれ。そもそも運など鍛えられるわけがない。

「私はスロットマシンに挑戦してくる。必ず、かのスリーセブンを揃えて見せる！」

と、真紅のドレスの裾をはためかせながら、戦士は己との闘いに挑みにいった。

ちなみに腰に提げた剣は受付にて没収されている。戦士は食い下がるうとしたが、追い出される心配があつたので結局は諦めた。但し、短剣は隠したままである。ザルすぎるでしょ、チェック。

「マホツカは？」

遊び人の素質を十二分に兼ね備えたマホツカは何に挑むのだろうか。

「ワタシはブラックジャックで元手を増やしてくるわ」

と、とんがり帽子を揺らしながら、マホツカはディーラーとの闘いに挑みにいった。

ちなみに腰を置くはずの釣竿袋は受付にて没収されている。理由は剣と同じで危ないからだとか。

でも、服装に関してはローブのままで大丈夫だったんだよね。ハロウィンはまだだいぶ先なのに、カジノ側の基準がよく分らん。「僧侶ちゃんは？ 何か遊んでみたいものとかある？」

直視すると思考領域の九分九厘を奪い取られてしまうので、顔はあさつての方角に向けた状態だ。うわーん、もったいない。

「えっと、私は……。いえ、勇者さんのお供をします」

普段と比べてトーンが低いのは気のせいだろうか。どこか強く自粛している感じがしないでもない。さすがの僧侶ちゃんも、カジノが発する魔性のオーラにあてられて、興奮しちゃっているのかな？ でもそんな僧侶ちゃんもかわいいからOK！

「勇者さんは何かやりたいゲームでも？」

にゅー！ その服装で下から見上げてこられると昇天しそー！
むむむ胸が、決して大きいというわけではないけど——（やっぱわたしより大きい）——その胸が、ぐはっ！ 落ち着け、落ち着くん
だ。

「はあ、はあ、ええっと、特にないかなあ」

資金稼ぎのためにカジノへ訪れたのだけど、世の中ギャンブルで財を成したのはギャンブルを営む側だけであると、わたしはよく理解している。ので賭博には手をつけるつもりは毛頭ない。

大人な遊びの世界はそんなに甘くない。ほとんどの人は散財する末路に行き着くはずだ。

気合満タんな戦士とマホツカには悪いけど、あまり期待はしていない。せめて借金をしない程度に遊んできてほしいところである。

旅の資金は……別の手段を考える必要がありそうだ。やっぱ初心に返ってモンスター狩りですかね？

まあ、それは後でいい。今日はせつかくなので、せめて雰囲気だけでも堪能しておかないとね。わざわざガスまで足を運んだのだから。

「とりあえず、回ってみよっか」

「はい、そうですね」

バーニガールのお姉さんや、カクテルグラスをトレイに乗せるウェイトレスさんたちを眺めながら、目的もなく僧侶ちゃんとぶらつくことにした。

派手な装飾ときらびやかなシャンデリア。マシンゲームに夢中になる女の人から、テーブルゲームで大勝利をしてチップをどっさり置いていく気前のいいおじさん……。

ああ、世界は平和だ。大魔王討伐の旅とか、まじで忘れなくなってくる。特に金銭的な面での事情を。

ふと、隅っこのスペースにて、何やら人気の少ないカウンターが目止まった。

「あれは？」

「きっと景品交換所ですね」

おお、なるほど。稼いだコインを物品と交換できるシステムなのか。

「ちょっと覗いてみよ」

カジノ交換所か。いったいどんなアイテムが用意されているのだろうか。

僧侶ちゃんと二人でカウンター上の貼り紙を仰ぎ見た。

《世界樹の葉》	1 / 000 コイン
《メリガンメール》	5 / 000 コイン
《はやぶさの短剣》	10 / 000 コイン

おおつ、何かすごそうなアイテムがたくさんある。ほしいなー。と、さらに下の段を見てみた。

《自爆の腕輪》	5 / 000 コイン
《自壊の鉄球》	5 / 000 コイン
《自滅の盾》	5 / 000 コイン

「何、あれ……」

「何やら『捨て身』な波動を感じますね……」

非常に怪しげなネーミングの景品だ。装備したらソッコーで戦闘不能になりそうな予感が臭ってくる。

わたしが懐疑的な眼光を放っていると、子供連れのジェントルメンがやってきた。

「わあー、パパー！ あの一番下のほしいなー！ 買ってー！」

一丁前にネクタイを締めた少年が父親にねだり始める。

「どれどれ……模型か？ そうだな、せっかくの誕生日だ。何でも買ってやるぞ」

微笑ましい光景だ、けれど子供のうちから贅沢を覚えさせるのは

感心しませんねお父さん。

けれど、誕生日では大目に見てもいいか。わたしもバーズデーには母がフンパツしてくれて特売品ではない獲れたて新鮮なお肉をげふんげふん。

「どうしました、勇者さん？」

「ううん、何でもない、何でもないよ」現実には本当に残酷だ。

それよっか、少年がおねだりした景品はどんなだろう。模型だなんて、いかにも子供っぽくっていいね。確か一番下のつて言ってたっけ。

《1200分の1往海艇・ヒルデガルーダ参号》 1,000,000コイン

！？

はいー！？ 何だこの値段！ だつてただの模型でしょ？ 確か1コインが20セントだから……………って、どんだけボツてんだよ！！

「よし、これをくれ」

「かしこまりましたお客様」

いやいやいやいやいや、ええー！！ マジで買うの？

「わーい！ パパありがとー！！ わーいわーい」

「ハッハッ、安い買い物だ」

「ママにはないしょ？」

「ママには大好きなカップのぬいぐるみを買ってあるから大丈夫だよ」

「さっすがパパー！」

「さあ、買う物買ったし、そろそろ帰るぞー、ハッハッ」

まじ……………かよ。

コインではなくゴールドなカードで支払っていったジェントルメン。さすがはラスゼガス、わたしと住む世界が異なる人がふつーに

いる。

しかし、あの値段はやっぱおかしくないかな。

「僧侶ちゃんはどう思う？ やっぱ高いよ——」

「いえ、打倒なお値段かと思っています」

へ？

「あの模型は、伝説の原型師《シッド・リンドブルム》氏が設計した《ヒルデガールダ》シリーズの参号機です。二十万ドルではまだ良心的ですね」

そ、僧侶ちゃん、詳しいね……。

「私も参号機と参号機、それとシリーズの前身である《ヴィドルガンス》を所有しています。ただ本当にレアなのは参号機なんですよ。シッド氏が完成した作品を前にして設計ミスがあったと述べ、販売中止となった幻の参号機。初回ロット分が闇ルートに回っていると耳にしますが、まだこの眼で見たことがないんですよ。もしオークションにでも出品されたら、全財産を投げ打つてでも……」

住む世界が違う人がこんなにも近くにいたことを失念していた。

ほんと、お金持ちな人の考えはよく分かりません。

？・リバティ・ベルを鳴らして

場内をうつろくこと小一時間、ようやくにして半周することができた。他人がゲームを遊んでいる姿は安心して見物することができるので、ついついゲームの行方を最後まで見たくなってしまう。

それに、このカジノ場広すぎる。ベースボール球場か、フラワー屋敷ぐらいはありそうな下敷地面積だ。

人ごみで、はぐれないようにするためか、途中から僧侶ちゃんに腕を握られているのがなんとも心地良い。僧侶ちゃんのシャイニング・ソフト・フィンガーに触れたら、どんな妄想もぶち壊されるに違いない。

「あつ、スロットマシン」

ハート、星、蹄鉄などなどの絵柄が描かれた三つのリールを無限回転させる機械が、所狭しと並んでいた。横一列ではなく、六台で花びらのような円状に配置されているのがなかなかにくい。

「戦士はまだいるのかな」

「あれからだいぶ時間が経ちましたからね、もしかすると……」

一時間も遊べば投資したコインが枯渇しているかもしれない。

しかし、それは杞憂のようだった。棘ならぬ剣を隠した真紅のバラは、真剣な面持ちで停止しているリールをねめつけていた。

「戦士」、調子はどんな感じ——」

「でりゃあつ！」

うわっ！ びっくりした。いきなり大きな声出さないでよ。

壮烈な掛け声を上げながら、リールを回転させるスピンボタンを押す戦士。モンスターと戦っているわけじゃないんだから、もうちょいリラックスしたらドデスカ？

「くそつ、駄目か」

指に込めた気迫とは裏腹に、順に停止するリールの絵柄は三つともバラバラだった。トランプにも使用されている赤・黒・赤のマー

クが、対面するプレイヤーをあざ笑っているかのように見える。

「戦士、どんな按配なの？」

「勇者か。見ての通り、全然揃わない。やはり私もまだまだ未熟なのだな」

いや、だから運の能力値とか関係ないから。

そもそもスロットマシンでは勝てないのが普通なのだよ——と僧侶ちゃんから聞いた情報。でも一発当てれば億万長者になれる可能性を秘めているとのこと。

にしても、随分とスロットマシンも進化したものだ。学校の近くにある喫茶店でお古のマシンを遊んだことがあったけど、本当にシンプルだったからね。今や電光板が装着され、文字や絵文字が演出を華やかにしている。

「ところで戦士、けっこうコイン残っているよね？」

マシン付属のコイン受け皿にはかなりのコインが入っていた。もしかしていい出目が一度揃ったのだろうか？ 意外とやるではないか、戦士も。

「いや、実は今しがた始めたばかりなんだ」

「えっ？　なんで？」

もしかして精神統一でもしていたのだろうか？　戦士ならやりかねない。

「ふむ、少々軟弱な男たちの相手をしていてな。それで時間を取られてしまったんだ」

！？

だ、だ、男性の相手ですとー！？　えっ、うっそ、まじっすか戦士さん？

「そ、そそそ、それはつまつまつまり——」

「ああ、随分と執拗な輩が何人かいてな。だが所詮は腑抜けばかりだった。殺気を込めた視線を向けたら、震え出して逃げていった。まったく、あれしきで背中を見せるとは情けない」

……………。

ああ、そういうことですか。

まあ、今の戦士は掛け値なしで美人だからね。ちょっと手を出してみたいと思うには分らないでもない。男性客たちも気の毒に。

「ところで戦士さん。どうして一レーン設定なんですか？」

わたし達と会話している間も、コインを入れてはスピンボタンを押し続ける戦士。よく見るとマシンのレーン設定は一だった。最大の三レーン設定にすれば、払うコインの枚数は増えるけど、斜めのラインも加わるので絵柄の揃う確率も高くなる。周囲の台で遊ぶお客を見るに、みな三レーンで遊んでいた。

「『闘い』とは、いかなる時も一本勝負だ。三本勝負など、その時点で自分は弱いと断言していることだ」

さいですか。戦士さんマジかけえつす。

せっかくなので、しばらく戦士の闘いとやらを見守ることにした。「見ている、次こそは」

ハート

スピード

ダイヤ

相変わらずのバラバラ大事件だ。

「まだまだー！」

チェリー

スイカ

プラム

実においしそうな組み合わせだ。でも何でスイカなんだろう？

「くそッ！　まだまだまだまだあッー！」

オタマジャクシっぽい生き物

モグラっぽい生き物
プリンツとした生き物

あれ？ いきなり絵柄の趣向が変わったね。
「まだだ、まだ終わらんぞッ！」

黄色の鳥？

空飛ぶ乗り物？

竜王（笑）？

おっ？ なぜかリール上部の電光板にウサギが出現すると、コインが吐き出された。スズメの涙ほどしかないけど。
「負ける……！ ものかああああッ！」

スター

キノコ

キノコ

オマケな組み合わせでもよさそうな感じだけど、揃ってないものは揃ってない。

てか絵柄多くないですかこのスロットマシン？ こんなんじゃー儲けはおるか、絵柄を三つ揃えることすら難しいでしょ。

「戦士、やめた方がいいんじゃない……」

「そうですね……。おかしいですよ、このマシンは」

「ふっ、ここまでできたからには尻尾を巻いて逃げるわけにはいかないッ！」

ああ、財布をカラにする人の常套文句だ。

「戦士道とは、諦めぬことと見付けたり！」

解釈するのが難しい言葉だな。

「私が座った椅子は、途中退席できない……！」

いや、できるでしょ。

「今度は揃える！ 揃えると決めた……！」
スロットマシンが壊れるんじゃないかと思えるほどの、衝撃の指弾丸を叩き込む戦士。

7

「おお？」

初めて7を見た気がする。

「よし、次いけ！」

7

「おおお！」

もしか、もしかこれはいつちゃうんじゃないですか戦士さん！

「最後——決まれええええ——！」

美女の雄叫びがカジノの喧騒に溶け込む。声を出したところで結果が左右されるわけではないんだけど、こういうノリは理解できないもない。

そして運命のリールが回転を止めた。いったか——、

B A R

ですよね……。

「ぐはっ、ま、負けた……！」

やっぱ駄目だったか。まあ、気合でどうにかなるようなものでもないからね。

と、なぜかコイン受け皿に入っているコインがジャラジャラと音を鳴らしながらその姿を消していった。

「おい、なぜコインが吸い込まれていくんだ!？」

手を伸ばしてコインを掴もうとする戦士であったが、時既に遅かった。

「ぜ、全部……呑まれた……」

儚くも、戦士艦隊は砂の海へと沈んでいった。

？・カジノ・de・ボコチヨ

「なぜだ……、なぜ……」

スロットマシンとの闘いに敗れた戦士。放心状態のままボソボソと呟く姿は、もはやお決まりのパターンだった。とりあえず放っておいてもあれなので、一緒に――半分引きずりながら――マホツカを探すことにした。

「マホツカは大丈夫かな……」

「勝負運は強そうな人ですからね」

うーむ、仮に戦士と同じ目に遭った場合、マホツカなら意気沈没などせず、怒りフルスロットルで店を破壊するかもしれないからね。一人にしたのは失敗だったかな……。負けていないか別の意味で心配だ。

ブラックジャックは人気のゲームなのか、プレイテーブルがフロア全体にドミナント出店していた。どうにかマホツカが歩いていった方向を思い出しながら探すこと数分、

「アンタたち、なーに湿気しけたマツチみたいなツラしてるのよ？」

と、目立つとんがり帽子の黒いクリスマススローズが、欣喜雀躍きんきしゃくやくな顔で現れた。どうやら一通り遊んで引き上げてきたみたいである。

「いや、戦士がスロットマシンで大負けしちゃって」

「なぜだ、なぜ……」

壊れたレコードみたいに同じセリフを繰り返す敗戦士。これに懲りて、二度とギャンブルには手を出さないでほしいところだ。

「それで、マホツカの釣果は？」

まあ、訊かずとも表情で判断できるんだけどね。

「ふふん、見ての通りよ」

シユツと、マホツカは見せびらかすようにローブの袖から何かを取り出した。

「あれ？ それって」

つい一時間ほど前に景品交換所で出会ったジョアブルピーが所持していたカードのブロンズ版だった。どうやらこの店専用のコインカードらしい。確かに、たくさんのコインを持ち歩くのは大変だからね。

「それっていくらぐらいなの？」

「んー、ブロンズは一万コインからだったかしら？ このカードには五万入ってるけど」

！？

「ご、五万コイン！？」

「い、一時間ちよつとで五万！？ ええー！？」

「すごいですね、マホツカさん」

「ふっふふーん、ワタシにかかれば楽勝よ。それに今日はやたらツいてたのよね。気分はまさにテンホー・チーホー・チューレンポーションって感じがしら」

えっ？ それって死亡フラグなんじゃ……。

「でもよかった。それだけあれば、ウィー八島までは間違いなく行けるね」

ふっ、母直伝の極貧サバイバル術を発動させれば世界一周も夢じゃないけどね。但し軽度のトラウマを覚えるから、この宝刀だけは抜くつもりはないけど。

「はあ？ 何言ってるのよ。これは元手よ、も・と・で！ 本番はこれからなんだから」

へ？

「まだ続けるの？ もう十分なんじゃ……」

「ノンノンノン、まだまだいくわよ！ ツいてるときに稼がないでいつ稼ぐのよ。幸せの赤と緑のリングはすぐ逃げちゃうのよ」

深追いは死亡フラグと相場が決まっているのでは……。

「まあ見てなさいって」

ズカズカと人ごみを分け入って分け入って進むマホツカ。その勇ましい背中を追って下の階へと降りる。まだ地下があったんだ。

螺旋状の階段を下りること数十段。その光景は突然目に飛び込んできた。

「こ、ここは――」

サンバとマンボとテクノが混ざった、とにかくうるさい曲が流れるベースメント2は、それを上書きするほどの熱狂と歓声が地響きを鳴らす。そしてさらに、歓喜のファンファーレと悲哀のタンゴが沸き起こった。その理由とは――、

「《ボコチヨ》！？」

広大な地下空間の中心部には楕円形のレース場があった。そこには色取り取りのボコチヨが騎手を背中に乗せて激しいデットヒートとオーバーテイクを繰り返している。

「何、ここ？」

「どうやらレースの会場みたいですね」

ゴールラインを八頭のボコチヨが順々に駆け抜けると、紙吹雪が舞うわ舞うわ。

「そう、ここは《ボコチヨレース》のゼガス会場よ！」

ボコチヨレース？

ちなみに《ボコチヨ》とは、簡潔に述べると馬みたいな鳥のことだ。翼が退化した代わりに足の筋肉が発達したとかなんとかで、陸上で最速を誇る生き物とのこと（瞬発的ではなく継続的な）。

生物学の先生曰く、馬の仲間なのか鳥の仲間なのかは、レースさながらの白熱した不毛な議論が、どこかの国際会議で行われているとかいないとか。

「勇者は知らなかったの？ まだ一般人には認知度が低いよね」
普通の競馬なら知っているけど、ボコチヨレースは知りませんでしたね。

ボコチヨといえば、主に陸路の旅にて移動手段として活用される温厚な動物だ。まさかこんな賭け事に駆り出されていたとは、ボコチヨも大変だな。

「ようするに賭博レースってことだよね？ 競馬みたいな」

「そゆこと」

「噂には聞いていましたけど、これほど熱狂していたとは」
ふーむむ。

「でもレースって、当てるの難しいんじゃないの？」

個々の能力差はあるかもしれないけど、やはり不確定要素が大きいのでは？

「ふふん、心配無用よ。何つつたって耳寄りな情報を手に入れたのよね。かの《マートヤのつぶやき》で見たんだけど、最終レースにあの《セイホーフハイ》が出走するのよ！」

と、言われましても。何のこっちゃ。

「知らないのは無理もないわね。聞いて驚きなさい、セイホーフハイはボコチヨレース界に君臨する無敗の帝王なのよ！ 久しぶりの参戦ゆえかオッズは三倍になってるけどね」

それってどう考えても死亡フラグだよね？

「そんじゃレース券買ってくるわ。アンタはこれ読んで少しは勉強してなさい」

と、マホツカからタブロイドサイズの競馬新聞ならぬボコチヨレース新聞を手渡された。見れば何やら赤いペンでいろいろと数値データが書き込まれている。どうやら二番のセイホーフハイ一点張りに決めたのだと読み取れた。

「他にどんなボコチヨが出走するんでしょうか」

「確かに、ちよつと気になるね」

ラスゼガス スプリングカップ

最終レース 障害3000メートル

1 . ツンツンヘッドデイトナ

2 . セイホーフハイ

3 . ゲキアマセンベエ

4 . ゲレゲレパンサー

5 . イクシオンフォスラー

- 6・マルコヴオーミリオン
- 7・サンダーカーノープス
- 8・ハリボテナッソス

何か、名前がコいな。

「どう、少しは理解した？」

レース券を購入してきたマホツカ。どんなの買ったんだろ。

「モチ二枠の単勝よ。全額賭けてきたわ」

全額って、五万コイン全部！？

「ふふん、これで一気に十五万コインね」

もう分からん、何もかも。考えるのをやめて楽になろう。

「ギャンブルは時として大胆にならないといけないのよ。コソコソチマチマやってたらお金が腐るわ！」

さいですか。マホツカ先生マジパネエっす。

「あ、そろそろ始まるみたいですよ」

八頭のボコチョがスターティングゲートへと入る。なぜか五頭目だけやたらと時間を要したみたいだけど、それも終わって準備完了のようだ。

『レディースえーんどジェントルメーン！ 今宵の最終レース、運命はあなたが託したボコチョ次第。笑って豪華ディナーをゼガスの夜景と共に満喫できるか、はたまた泣きながら貨物列車の中でブタと一緒にわら束の上で寝ることになるのか。』

それではボコチョレースうー、レディー……——ゴおー！！』

ピンクのスーツに真っ赤なシャツ、小指以外を全部立ててマイクを器用に握る司会者の掛け声とともに、ゲートが一斉に開いた。無責任な願いを託された七つの流れ星が、ダートなコースへと降り注ぐ。

「オラー！ 絶対に一着で入りなさいよ！ アンタに全賭けしてんだからね。負けたらローストチキンにするわよ！」

隣で激を飛ばすマホツカ。ただの迷惑客です、本当にありがとう

ーよ！

『おおっと！ 五枠六番マルコヴァーミリオン、ディアガの大穴ゾーンにてジャンプできずに落下！ やはりただのボコチヨだったのか？ それでは世界の反対側までアディオース！』

いやいやいやいや、そこまで落下しないでしょ？ 頭が余裕で見えてますけど。

『おおっと！ 四枠四番ゲレゲレパンサー、騎手になついていなかったのか、突然暴れ出してコース外へと飛び出した！ これは残念ながら失格だ』

きつと名前が気に入らなかったのだろう。

『おおっと！ 三枠三番ゲキアマセンベエ、内海エリアにてまさかのカナツチ発覚！ 体が沈むよどこまでもー、フォーエバーー！』
溺れる深さじゃないじゃん！ 他のボコチヨは足の真ん中ぐらいまでしか浸かってないし。

リタイヤ続きのアップサイド・インサイド・アウト・レース。（生き）残っているのは頭の毛がツンツン尖った金色のボコチヨと、我らの期待を背負う無敗の帝王だけだ。

『おおっと！ 二枠二番セイホーフハイ、名に恥じないレース展開を見せてくれる！』

さすがは不敗を冠するだけはある。まさに『桁違い』のスタミナで最後の直線突っ走る。

「よっしゃー！ 勝ったわー！」

そう誰もが思っただろう。実際二着とは一ボコチヨ身以上離してゴールした。

しかし、勝利の女神は微笑まなかった。

『おおっと？ ここで入った情報です。何とセイホーフハイの騎手ジヨニー氏ですが、事前のドーピング検査で陽性反応が出た模様。本人は昼食に食べた変な肉のせいでお腹をこわし、そのとき飲んだ胃腸薬だと説明しておりますが、残念ながらこれは失格だ。』

よって二着に入った一枠一番ツンツンヘッドデイトナが繰り上が

りの一着になります。そして二着は……おおっと!? いつの間にか復帰していたハリボテナッソスがゴール!!」

そしてレースは終了した。

「ギャー……!!」

儚くても、マホツカキャッスルは砂上の楼閣だったかのように崩壊した。

？・はるか夢の後

「どむう！」

「ぐふっ！」

「ぎゃん！」

有無を言わずしよっぱかれた部屋に三人揃ってぞんざいに放り込まれた。戦士とマホツカに潰されるように下敷きになるわたし。

酷い、わたしは無罪なのに！

洒落たオフィスの応接室といった感じの部屋は完全防音設計なのか、カジノ場やレース場の喧騒が幻であったかと思えるほどの、耳がキーンと痛くなる静かさだった。

「だ、大丈夫ですか、皆さん！？」

ああ、僧侶ちゃんのエンジェルフェイスを見られれば、どんな不遇な環境に陥っても雑草のごとく立ち上がれ……ないよ！ 上の二人早く退いて！

「う、ん？ ここは……どこだ？」

記憶が曖昧な状態の戦士。まあ、無理もない。

ボコチヨレースの結果がお気に召さなかったマホツカが激昂したのはすぐのことだった。怒り心頭で司会者兼解説者の人に不服を申し立てに行こうとしたのだ。

マホツカ一人だけなら、わたしと僧侶ちゃんでどうにか抑えることはできなくもなかったのだけど、スロットマシンの変な仕様に悩まされていた戦士が覚醒し、あるうとことかマホツカに同調したのだ。何でこういときだけは息がピタリと合うんでしょかね、この二人は。

ちよつとした騒ぎの波紋がレース会場に広がりそうになったのを、わたしがどうにか二人を宥めることなだで解決を図ろうとしたが、やはりとういか無理だった、だったよ。

その結果、なぜかわたしまで黒服のお兄さんたちに連行され、こ

うして別室へと隔離された次第である。

「くあー、何すんのよ！　それが客に対する態度！」

マホツ力は起き上がるとすぐに、扉の前で阿修羅像よろしく阿吽あうんと仁王立ちする黒服の警備員さんたちにくってかかる。だがお兄さん二人は微動だにしなかった。プロや。

まあ、問題を起こしたのはわたし達だからね。もはや客扱いは見込めない。

だがしかし、

「あゝ、わたしは無罪なんですけど……」

「……………」

完全無視かよ。サングラスの下に隠された表情がまったく読み取れない。

「ふふん、一人だけ助かろうとしても無駄よ、勇者」

「よく分からんが、ここは皆で協力して乗り切るべきだ」

あーもう、何でこんな面倒なことになっちゃったんだよ。だからカジノなんて嫌だったんだー——と嘆いたところで後悔先にも後にも立たない。

この後いったいどのような処分が下されるのだろうか。ブラックリストに登録され出入り禁止になるぐらいなら全然力モンなんですけどね。

「とにかく、これ以上問題起こしたくないから、向こうの出方を待とう」

暴力行為はさすがにまずいからね。この年齢で《ズールトベイル監獄島》送りにはされたくないなどない。

そして待たされること数分後、マホガニーの重厚な扉が外側から開かれた。

「これはこれはお客様方。何か当店に御不満でもありましたでしょうか？」

そう述べながら入室してきたのは白のジャケットを羽織った老人だった。両腕に高級そうな時計を五つもはめ、鷹の金細工が付いた

杖をついていた。

あれ？　どこかで見たことのある人だな……………って、昼にこの店の前で僧侶ちゃんにイチャモンつけてきたおっさんではないか。

「おや、どこかでお会いしましたかな」

言葉遣いはくそ丁寧だったけど、顔は半笑いで、明らかにわざと口に出しているのが窺える。

「アンタ、昼のカラーじゃない！」

「どうしてこんなところで出てくる」

「ほんどだよ。二度と会わないと思っていたのに。」

「そう言えば自己紹介がまだでしたね。わたしはここ《コルツネオ》カジノホテルのオーナーを務めている者です」

オ、オーナー！？

まさかトップがいきなり出張してくるとは、そんなにヤバメな状況っすか？

「ちよつとー、さっきのボコチョレースおかしいでしょ！　何でゴールのタイミングでドーピングの話が出てくるのよ！！」

「私が遊んだスロットマシンもおかしかったぞ！　なぜコインが吸われるんだ！！」

オーナーを前にして余計にヒートアップする戦士とマホツカ。まあ、理不尽さは共感できなくもないけどさ、とりあえず握った拳を緩めなさいって。大人の社会というのはね、先に手を出した方が負けになるから。

「とんだ言い掛かりですね、お客様方。当店は至って健全な運営を行っているカジノですよ。あくまでもルールに則つてのことです」

「何ですってー！？　アレのどこが健全なのよ！　この店爆発させるわよ！！」

「貴様、場合によっては、斬る！」

一触即発な状態に、オロオロしている僧侶ちゃんがチョーゼツかわええー……………って、今はそれどころではない。

「御不満があるようですね」

「当たり前じゃない！」

「当たり前だ！」

二人の殺気に当てられてもオーナーは冷静にして沈着だった。そしてゆっくりと、まるで狙っていたかのように次の言葉を紡ぎ出した。

「それでは、ここはわたしと一勝負しませんか」

勝負？

「どういうことだ」

「ここはカジノですよ。全てはゲームによって解決するべきでは？え、そうなの？ 普通に反省文書いて終わりにした方が……。」

「ふん、面白い考えじゃない」

「あなた方が勝てば、負けた分を十倍にして返しましょう」
じゅ、十倍！？

「つてことは、一、十、百、千……ご、ゴゴゴ、五十万コイン超！
？ 十万ドルオーバー……！？」

「ま、負けたらどうなるんですかね……」

皿洗いぐらいなら全然OKなんですけど、まさか下界にパージされないよね。

「そうですね、負けたら……」

そこで言葉を切ると、オーナーはわたし達一人一人に順に目を向ける。そして最後に僧侶ちゃんに視線を合わせてしばらくじっと見つめた。やっぱロリ……、

「お客様が負けたら、わたしの頼み事を一つ叶えていただきたい。なに、たいした内容ではないですよ。ほんのお遣いみたいなものですから」

あ、怪しい。カビ臭い破邪石を取ってこいとか言われそう。

「ふん！ 何だっていいわよ！ どーせ負けるつもりはないんだからね」

いや、一応内容を確認しておかないと。契約書だって最後まで読まない痛い目見るし。

「ギャンプラーはね、負けたときのことなんかイチイチ考えないのよ！ 負け犬の発想はお金とツキを逃がすだけよ！」

だから、それは死亡フラグ……。

「面白い。それで、何で勝負するんだ？ 剣か、槍か？」

ほんと『勝負』って言葉に弱いんだから戦士は。いつもの心配性はどこ吹く風って顔してるよ。

「そんな物騒な道具など使いませんよ。ここはギャンプラーの集まる場所、当然これで……」

と、オーナーは胸ポケットの中に手を入れると、中からランプの箱を取り出した。しっかりとセキュリティシールが貼られている。

嫌な予感しかないのは、激しく気のせいであってほしい。

？・砂漠の行軍

春ノ暑サニモマケズ、夏ノ暑サニモマケズ、
秋ノ暑サニモマケズ、冬ノ暑サニモマケズ、

カンカン照リノ太陽ニモマケズ……、徒歩デ砂漠ヲ歩ク苦行ニモ
マケズ……………、

「つて無理だよ、ケンジ先生！」

天を仰げば、青いカーテンと、一点の白い染み。

大地を見渡せば、延々と敷かれた黄金色の絨毯。

体感温度は五十度を超えているのではないかと思えるくらい、わたし達は砂漠の酷暑を心ゆくまで味わっていた。

「ふふ、これしきのことで音を上げるのは早いぞ、勇者。これも大魔王を倒すための修行だと思えば……………すまん、無理だな」

ですよね……………。

後ろを歩く戦士も、さすがに苦しそうだ。

「ほんと暑くて熱いわよね……………、目玉焼きの気持ち分かるわ」

最後尾にてプカプカと浮遊する釣竿袋に乗りながら付いてくるマホツカ。一番楽そうなのはすんだけど、光を吸収する黒色のロープのせいで、一番バテ気味だった。

別の服を着た方がいいんじゃないかと、出発の前に注意をしたのだけど、当の本人が頑なに嫌だと意地を張るので、そのままだ。そこまで拘^{こだわ}る理由が知りたい。

しかし、本当に熱い。しかも砂地つて想像していた以上に歩くのが大変だ。砂に少し埋まる足を持ち上げるのがボディブローのようにジワジワと効いてくる。加えて小高い砂丘を登っては下つてのアップダウン続きなので、疲労がハンパない。

え、ラクダは？ 《砂ボコチヨ》がいるじゃないかって？ はっはっは、実に面白いジョークだ。そんな便利なもの借りる金なんてねーんだよ！（切実）

ああ、この広漠とした砂漠のどこかに、本当に目的の《ピラミッド》はあるのだろうか。もしかしたら騙されたのかと思わざるを得ない。

しかし、僧侶ちゃんのためにも、ここは暑さに耐えて頑張らなくてはならない！

「私の運が、もう少し鍛え上げられていれば、こんなことには……」
「あのカレーオーナー、いつか覚えてなさいよ……」

さて、なぜわたし達三人は《東遊記》でもないのに砂漠をピクニックしているのかと言いますと、話は簡単、カジノのオーナーとの勝負に負けたからである。

『戦士&マホツカVSオーナー』の対決種目はポーカーだった。

先の展開が読めない激しいバトルだった——というわけではなく、ゲームはさざ波のごとく坦々と進行していった。

オーナーは、別段イカサマな強さでもなく、最後にありえない一発大ドンデン返しがあったわけでもなかった。戦士とマホツカを、真綿で首を絞めるような感じで、徐々に徐々に、しかし着実に二人のチップを削っていき、そして勝利を収めたのだ。

戦士は終始オーナーのブラフを警戒してか、すぐにフォールドしてしまう超慎重派。マホツカは逆にがんがんレイズしまくって痛い目を見る超特攻派。そんな協調性の欠片もない二人が、トランプゲームに於いての『戦い』を知り尽くしたオーナーに勝つには、運以上に経験値が《ヘヴィメタスライム》百匹分は足りなかった。

それでこの顛末である。

勝負前の約束通り、わたし達はオーナーの頼み事を遂行する羽目になったのだ。

内容は、なんでもゼガスの北に広がる未開拓な砂漠地帯に、伝承に伝わる伝説のピラミッドが存在し、そこに眠ると伝わる幻のレアアイテム《黄金の爪垢》を取ってこいというのだ。

『伝承の伝説の幻のレア』って、もはやそれ存在しないって宣言してるだろ。あのおっさんはどこぞの月のお姫様なんだよ。そんな秘

宝は皮肉屋のドレイクさんか、貨物会社のジョーンズさんに依頼してほしいところだ。

文句は止め処なく出てくるが、約束は約束だ。取ってくれば負けた分のお金は返してくれると言うし、ピラミッド探索のための資金をちよつとだけ工面してくれたので、根っからの悪人だとは思えない。

だがしかし！　一つだけ絶対ゼツタイぜえええったい許せないことがある！

「はあ、はあ……………そ、僧侶ちゃん……………」

そうなのだ、今わたし達は、わたしと戦士とマホツカの三人しかないのだ。一人メンバーが減ってしまうと、なぜだが前衛的なパーティー構成になった気分がするけど、そんなことはどーでもいいと・に・か・く、僧侶ちゃんがいらないんだよ！

なぜならば、要は担保にされてしまったからである。まあ、普通はそうするよね、わたし達が約束を破棄して逃げるかもしれないし。僧侶ちゃんがパーティーから抜けてしまったのは様々な面で痛手だ。回復の支援を得られないのは当然のこと、博学多識な常識人を失ってしまった点も挙げられる。

そして何よりも、心の癒しがなくなっちゃったんだよ（ここ重要）。わたしの生命活動を維持する『僧侶ちゃん成分』が補給できないのだ！　暑さで水分を失って脱水症状を起こすか、僧侶ちゃん成分が不足して魂が干上がるか、どちらが先となることか。

くそお、あのおっさんも、僧侶ちゃんを人質にするとはい、やはりロリコ――、

「ん？　何だあれは？」

ざくざくと足跡を砂の大地に残していくわたし達一行の前に、突如として巨大な三つの穴が目に入ってきた。なんぞ？

「不気味な穴だね……………一応迂回しよう」

「そつだな、何かの罠かもしれん」

直径が十メートル以上はあるサンドホールの深さは遠くからでは

まったく分からない。測るにしても近づくのは危険なので、無難にスルーするのがベターな選択だ。宙に浮くマホツ力は暑さでくたばっているのか、特に文句を漏らさなかった。

「ところで勇者、『砂の大陸』という本を知っているか？」

穴を避けて歩いているところで、戦士が思わぬ話題を振ってきた。

「戦士もあのファンタジー小説読んだことがあるの？」

「ああ、かなり昔のことだがな」

おおつ、これは意外な事実だ。戦士の性格からすると、武術書の類や精神論がテーマの堅苦しい本ぐらいしか読んだことがないと思っていたからね。まさか娯楽小説などを普通に読んだことがあったとは。

「名作だよな、あのストーリーは。砂漠でしか採取できない『デザートスパイス』を巡って、三大王家が戦争を引き起こす辺りとかいいよねー」

「ああ、特に砂漠での戦闘描写がすばらしかった。何度も読み直しては砂浜に行つて実践したことは、子供の頃のいい思い出だ」

……………なぜそうなる。

普通に小説議論をしようと夢見たわたしがバカだったのか、はたまた戦士の感覚がズレているのか。

「それで、どうしてあの小説の話さ？ やっぱ砂漠だから？」

「いや、ふと思ひ出したことがあってな。あの小説には実は面白い逸話があるんだ」

逸話？

「当然のこと砂で覆われた大陸は想像上の設定なのだが、中盤以降に登場するアノ砂漠のモンスターに関しては、筆者の実体験が元になっているらしいんだ」

アレ、か。

「初耳だね。筆者のジョークか何かじゃないの？」

水も食料も乏しい砂漠に、どうやったらあんな巨体なモンスターが棲息できようか。

「私も最初はそう思ったんだが、いろいろと調べてみると……」
「？ どしたの戦士、余所見なんてしちゃって……」

！！！！

それは、いた。

三つあった穴の一つから、うねうね動く薄砂色の太い柱のような肉体が出現していた。その先端を見ると、目も鼻もない顔が、たくさん歯を生やした大口を開けてこちらを威嚇していたのだ。話に夢中になっていたため気付かなかった。

「……もしかして、コレ？」

「……もしかすると、コレだな」

サンドワームが 現れた！

砂漠と同化した体はととにかくデカかった。キング系モンスターをもひと呑みできそうな大きな口を、太陽を食べるかのように天に向ける。

『ウウウウウウウボオ』

じゅるじゅるとヨダレを垂らしているのは空腹だからですかね……。

…。

「やはり本当に実在していたのか。私は今、猛烈に感動している！ そんな悠長なこと言ってる場合じゃないでしょ！ 敵だよ敵、モンスターっすよ。しかもメツチャ強そうなんですけど。」

「マ、マホツカ、ドカンと一発お願い！」

いつもこの手のケースはマホツカに任せちゃっているけど、いいよね？

「……………」

あり？ マホツカさ〜ん。

「どうしたマホツカ、暑さに負けている状況ではないぞ！」

サンドワームを凝視しながら顔を青くするマホツカ。

「まさか暑さで魔力切れとかないよ……ね？」

「……………ち、違う」

「何が違うんだ？」

「ダメ、なの……………よ」

へ？

「何が？」

「何がって、虫よ！ 虫に決まってんでしょ！！」

「「虫？」」

確かに、サンドワームは小説の描写同様にどこか芋虫っぽいよね。胴が長くて、うねうねしているし。名前もワームって付いているくらいだから、そうなのだろう。

でもさ、ここまで大きくなると、もはや虫とか関係なくなるようなレベルな気がするんだけど。まあ、気持ち悪いのは悪いけどさ。

「昔キヤベツ買ってきたときについてたあのイモムシ、成長したらキレイなチョウになると思ってたのに……………毎日エサあげてたのに……………何で、何でガになるのよ！ 朝起きたらワタシの顔に張り付いて……………ギニャー……………！！」

あーあ、自分でトラウマスイッチ押しちゃったよ。

『ウオオオオオオオアアン』

耳をつんざく唸り声を上げる砂漠の巨獣。周囲の砂丘が振動で崩れる。

や、やばそうな雰囲気だ。

「戦士、ここは逃走するよ！」

「くつ、こいつと戦えないのは残念だが、ここはそれが最善だな。僧侶がいない状態では、不要な戦闘は避けるべきか、？」

サンドワームは口を天からわたし達へと向けた。喉の奥まで針みたいな尖った歯がびっしりと生えているのが確認できる。

「こ、これは……………」

「ま、まさか……………」

『ウウウウウウウンオオオオオ』

無風だった灼熱の地に、突風が局地的に吹き荒れる。それは自然

の現象ではなく、サンドワームが食事をするためにわたし達を吸い込もうとしているのだ。

「ま、まじですかー!」

辺り一面しがみつける物など一切切ない。

サンドワームは砂を飲み込むことなど気にせず、吸い込みの勢いを強めていく。

このままでは呑みこまれてしまうと考えが行き着いた瞬間、わたしと戦士は揃ってマホツカの釣竿袋を掴んだ。

「イモムシ……ガ……イモムシ……ガ……イモ、って何やってんのよ!？」

「このままでは奴に吸い込まれてしまう」

「マホツカ、全速力で飛んで逃げてよ!」

アトモスさんやダイスンさんも驚きの吸引力。じりじりと口が近づいてくる。やべー!

「うがー、バカ! 定員オーバーよ!」

「そこを何とか!」

「早くするんだ、食われるぞ!」

そのセリフがトラウマに塩を塗ることになったのか、マホツカは意を決した表情となり、確認と同意の視線をわたしと戦士に向ける。「虫に食われるなんて最悪だわ! いいアンタたち、死にたくないかったら、ゼツタイに手を放すんじゃないわよ!」

放すものですか。

「そんじゃ、いくわよ!」

マホツカは釣竿袋に座り直すと、車掌さんよろしく腕で前方を指示した。

「生き残った選ばれし者の勇気よ、イモムシモンスターからの解放を約束せよ!」

ただの逃走なんだから、そんな大仰な言葉にしなくても。

「点け! 《イグニッション・ファイアボルト》!!」

へ——えええ——あああああ——あああああ——!!

!!!!!!

釣竿袋の後端に炎が灯ると、雷のごとく初速度イコール最高速度な勢いで爆進する。

三人を乗せた釣竿袋は、サンドワームの吸い込みを事も無げに振り切った。

「やった、モンスターが完全に見えなくなった！」

無事自由への逃走に成功した。

さすがはマホツカ、そこにシビれる、懂れ……は審議中。

「マ、マホツカ、もう止まっても大丈夫だよ」

空気の壁が顔に当たって非常に痛い。そろそろ限界だ。

「……………」

あり？ マホツカさ〜ん。

「どうしたマホツカ、モンスターはもういないぞ」

前方に顔を固定させたまま顔を青くするマホツカ。

「まさか止める方法を忘れたとかないよ……ね？」

「……………ち、違う」

「何が違うんだ？」

「ダメ、なの……よ」

へ？

「な、何が？」

「何がって、止まることよ！ この魔法は効果が切れるまでこのままなの！」

「「な、何だつてー！？」「」

砂塵を巻き上げながら爆走するホウキ星ならぬロッドスター。強烈なGに骨が悲鳴を上げる。

「い、いつまでかかるの！？」

「少なくとも十分以上よ！ 嫌なら手を放しなさい！！」

いやいやいや、いくら柔らかい砂地だからって、この速度で落下したら骨の一本や二本ぐらい折れちゃうって！

「なぜ前^も以って説明しなかったんだ！」

「あの状況じゃ、そんな暇なかったでしょーが！」

「マホツカ！ 前！ 前！ 砂丘にぶつか——」

「ぎゃ————！！！！」

モンスターと戦闘するも逃走するも、どちらも命懸けすぎる。

？・盗賊††

い、生きている、って、すばら……しい……。

砂漠のヘヴンズドライブから解放され、それから彷徨うこと数時間。既に体力も精神力も限界を超えていた。お花畑と川が見えるのは気のせいだろうか。

このままでは「その後勇者達の行方を知る者は以下略」になってしまう。

だが、神様はわたし達を見捨てはしなかった。

「オ、オアシスだ！ 今度こそ本物だー！！」

蜃気楼によるフェイクオアシスに二回騙されること三度目の正直、ようやくにして水分補給できる約束の地へと辿り着いた。

「こ、ここが楽園なのか……」

「そうね、アム・シエアーではなさそうね……」

すごくオーバーな表現をしているけど、今のわたし達にとっては過言ではない。

ではさっそく、清水で喉を潤すとしますか。

と、オアシスの池の水をすくったとき、ふと気付いた。

「ちよつと濁ってる？」

精霊の洞窟にあった回復の泉みたいな透明な水ではなかった。喉の渴きは癒えるかもしれないけど、その後で腹痛に襲われそうで怖い。

「ふふん、そーいうときは、任せなさい」

マホツカはガサゴソとローブの中で何かを探し始めた。もしかして策有り？

「飲み水で困った時はコレに限るわね」

取り出したのはトールサイズのタンブラーだった。ウィッチハットとブルームのロゴマークが描かれたカラフルなデザインが可愛い。

見た感じは普通のタンブラーと遜色はない。何かのマジックアイテムだろうか。

「これは魔法使いの七つ道具のひとつ《アルカナ・タンブラー》よ。どんな濁った泥水だって簡単迅速に飲み水にできるのよ！」

店頭でやっている実演販売の売り文句みたいな説明だな。

「どうやって使うの？」

「まずフタを開けて、そこに液体を入れて……」

マホツカはタンブラーにオアシスの水を適量注いだ。ふむふむ。

「次に魔力を込めて、よー……く回す」

やっぱ何事も基本は回すことにあるよね。

「そして完成！」

はや！

「ほらっ、飲んでみなさい」

マホツカからタンブラーを手渡される。フタを開けてみると――、

「おおっ！ 本当にキレイになってる！」

濁りがなくなって透明な水になっていた。さっすがマホツカ先生。

「それじゃお先に失礼、いったきまーす」

「一つ気をつけないといけないことがあるのよね。その水は――」

マホツカが何かを言いかけたけど、わたしは気にせず水を口に含んだ。

数時間ぶりの水分だ。きつと天上の味がするに違いない――、

「――？ むがむぐむご？」

「どうしたんだ勇者？」

何か………おいしくなくなくないですか？

「何なの、この味は？」

「というか味がない。」

「このタンブラーには欠点があつてね、水分以外は完全にろ過しちゃうのよ。つまりは超純水になるわけ」

なるほつど、どうりで無味無臭なわけだ。

早く改良版が出ないかしらと小言を呟くマホツカ。別に飲めない

わけではないので、そんなに気にすることでもないけどね。

わたし達は水の大切さを改めて五臓六腑に染み渡らせながら、ひと時の休息を過ごした。

そして、

「これからどうしよつか？」

結局ピラミッドのピの字も見当たらなかった。

「そもそも本当にピラミッドなど存在するのかが疑問だ。やはり、あのオーナーに騙されたのかもしれない……」

「マホツカ、アルフォンの地図で位置をつかめないの？」

精霊の洞窟の場所だって分かったのだ。伝説のピラミッドの位置だって――、

「ん、無理ね。暇鳥がいた塔と同じで、データベースに登録されていない場所は検索に引つ掛からないのよ」

む、ん、どうしたものか……、ん？

「あれは……人？」

池の反対側に人影らしきを発見した。てか人だ！

「あの人に聞いてみない？ 何か知ってるかも」

「人だと？ どこにいるんだ」

「あそこだよ。池の向こう側」

「ん……、よく見つけられたわね」

並みの市民プールよりかは広いオアシスの池。確かにそう言われていると、どうして人がいるって分かったんだろ。草木も鬱蒼うつそうとしているし。

まあ、偶然目が捉えてしまったに違いない。

「ちょっと尋ねてくるね」

「待て勇者、危険だ――」

心配性な戦士の制止をスルーして話しかけにいくわたし。果報は寝ててもやってこない。どん詰まりに陥ったときは、とにかく小さなことでも行動あるのみだ。

「すみませーん」

「……………」

全身をアースカラーの旅装で覆った旅人然とした人だった。身長はわたしと同じぐらいで、やや細身な印象。顔も目の部分以外を布で隠しているの、男性か女性かはイマイチ判断が付かなかった。

「旅の人ですか？ 道に迷ってしまってますか？ ピラミッドに行きたいのですが、どう行けばいいか知らないですか？」

「東の流砂地帯を抜けたところに、巨大なモンスターが徘徊しているらしい」

「モンスターが？」

「どうやら縄張りを守っているような気配だ」

「縄張りを守っているか……。でもわたし達は急いでピラミッドに行かなければならないんです」

「ピラミッドに行くには、モンスターの縄張りを抜けるしか方法はない。わたしが抜け道を案内してやってもいいんだがな。」

ただし、気が変わったら、いつでもわたしは抜けるからな」

仲間になりますか？

↓はい

いいえ

へ？

何ですかこのイメージは？ 初出だな。

それと会話がやたらと芝居っぽくなっちゃったけど、どして？

「あーっと、ちょっと待っててもらえませんか」

トトトと、戦士とマホツカがいる場所まで戻る。

「どうした勇者、やはり怪しい人物だったのか」

「いやさ、どうやら仲間にできるみたいなんだけど」

「仲間ですって？ あんな不審者を？」

うん、まあ、怪しいっていったら怪しく見えるけど、砂漠のど真ん中で黒服な格好をしているマホツカだって十分不審者に見えます

けど。

「あの出で立ちには明らかに賊に違いない。危険すぎるぞ」

でも、モンスターを回避する抜け道を知っているっていうし。それに、

「元はと言えば、二人のせいでこうなったんだから、今回は文句なしね」

「むう、勇者の決定とならば仕方がない」

「まったく、意外と酔狂ね、アンタも」

「しゃーねーなー、な反応をする戦士とマホツ力であつた。」

二人が危惧するように、見知らぬ人物をパーティーに加えるのは危険かもしれない。

だが、わたしにはなぜか彼（彼女？）が他人とは思えない感じがした。仲間になるべき存在がすると言いますか、匂いが漂うと言いますか、口ではうまく説明できないな。

これはもしか、勇者に備わる第六感だったりする？

とにかく、話はまとまったので、仲間に加えるべく三人揃って池の反対側へと移動した。

「道案内お願いします。えっと、名前は……」

「好きに呼べ」

「まじすか？ 本当に好きに呼んじゃうよ、ふっふっふ。」

「どうする？」

「では『盗賊』だな」

「ストレートすぎるわね。そこは『シーフ』でしょ」

「捻りがないよ、二人とも」

「てか、まだ職業が盗賊って決まったわけじゃないでしょうが。」

「じゃあ何よ？」

「うーん、やっぱ『ジューダス』？」

「どんな脈絡でそうなるのよ。意味分かって言ってるの？」

「すいません、ただ言ってみたかったです。」

「では『アサシン』でどうだ」

「そうくるなら『シャドウ』がいいわね」

「ダメダメ、それなら『クライド』でしょ！」

「「どうしてそうなる」「んだ」「のよ」

と、ブレインストーミング感覚で五分ほどディスカッションした末、ようやくにしてコンクルージョンした。

「満場一致で『ヤシチ』に決定しました！ よろしくね、ヤシ——」
「……盗賊でいい」

ええー！ 好きに呼べって言ったのに、もー。

それとやっぱ盗賊なんですか。指名手配とかされていないよね？
まあ、細かい事は無視しよう。

「それじゃ、しばらくよろしくね、盗賊」

手を差し出すと、少し躊躇されたが、最後は握ってくれた。

「あつ、わたし達の名前は——」

「好きに呼ばせてもらう」

クールなのか、自分勝手なのか、線引きの難しいタイプだな。

と、盗賊の何かがわたしに流れ込んでくる。おおっ、この感じ久しぶりだな。

職業 盗賊

レベル 17

武器 叩き潰す小太刀（+5） 名状しがたい小太刀（+3）

防具 忍びの衣

装飾品 忍びの小手 忍びのカフス

あの、装備がすごく忍者と主張しているんですけど……、本当に盗賊なの？

それと武器に変な言葉が修飾されているのは、ツツコミ待ちなんですかね？

ま、いつか。いろいろと複雑な事情があるのだろう、ん？

スリーサイズ B 90・W 58・H 88 推定Gカップ

スリーサイズ……だと？

ということは女性なんだ。まあ、声はそこそこ高かったし……。
ってそんなことよりもGカップってどゆこと？ 胸元はスラリと
してますけど、どこにそんな豊かなバストツ！があるというんです
か！？

「どうした、行かないのか？」

着やせするタイプなのかな……。気になる、実に気になる、非常に
気になる。

？・散歩するピラミッド

サンドワームとの遭遇率が低い抜け道を越えると、そこには砂丘のない穏やかな平地が広がっていた。不思議なことに、視覚から暑さを訴える陽炎がない。砂の色には黒味が混じり、明らかに今までの砂漠地帯とは異質であると分かる。

ここには何かがある、と言わんばかりの光景だった。

「ここまでくれば奴らは襲ってこない」

どこかほっとした様子で、盗賊は安全性を保障した。

「どうして分かるの？」

わたしの疑問への解答として、盗賊は屈むと砂を一握した。サラサラとそれを下に落とすと、砂は風を受けているのにもかかわらず、ほぼ垂直に落下する。

「詳しい理由までは分からないが、この辺りの砂は非常に硬く、そして重い。虫も棲息するのに適さないのだろう」

「なるほど」

確かに、この硬度なら地下を掘って進むのも一苦労に違いない。それにしても、随分と詳しいね。

「なぜそんなことを知っているんだ」

未だ盗賊に対して疑心暗鬼な戦士。言葉にも探るような含みがある。

「わたしから言わせれば、おまえ達が無知なだけだ。よく情報を何も持たずに、この砂漠に足を踏み入れたものだ。無謀にも程があるぞ」

「ぎくっ」「うぐっ」「むぐっ」

痛いところを的確に突いてきますね……。

でもさ、伝承の伝説なんだよ。情報なんて易々転がってないでしょ？

「それで、肝心のピラミッドはどこにあるのよ？」

「それが問題なのだが……」

と、盗賊は懷から小さくて台形型の物体を取り出した。十セント硬貨ほどの大きさで、厚みも同じぐらい。

「この中にピラミッドの位置情報が入っているらしいのだが、解析方法がついぞ分からなかったんだ」

ありとあらゆる手段を試したと付け足す盗賊の瞳には、「不覚」の二文字が浮かんでいた。

「それで、何これ？」

「さあな、皆目検討が付かない」

「『ギガバイト』と書かれているが、何かの暗号か？」

「売人によると、『魔法使い』なら扱えるかもしれない代物だと説明された。だから……」

「ん？ 何よ？」

魔法使いと言えば、マホツカの出番だ。

「マホツカ、これが何なのか分かる？」

「何って、ただの『SDカード』じゃない」

「『SDカード？』」

「そんなことも知らないの？」な表情で答えるマホツカ。いや、普通知らないよ。

しかし「SD」って、スーパー・デフォルメの略……じゃないよね？

「まあ、アンタたちには縁のない物ね。貸してみなさい」

マホツカは盗賊からカードを受け取ると、なぜかアルフォンを取り出した。

「ワタシの機種は標準で対応しているからね。スロットに挿して、フォルダを開くって」

カチッと、小気味良い音が鳴り、アルフォンにカードがピタリと刺さる。

「いったい何だ、あの奇天烈な鉄の板は？」
キテレツ

頭上に「？」マークを浮かべる盗賊。その気持ちはよく分かる。

「うー……ん、たぶん気にしたら負けだと思う」

わたしだって未だにアルフォンの構造はさっぱり分らない。とにかく便利なアイテムという認識だ。世界地図の閲覧からホテルの予約までできるなんて、どう考えてもオーバーテクノロジーだよな、あれ。

「中身はEXEファイルか。念のため《ウィルスバスターズ》でチェックして……………OK、そんじゃ実行つと」

どこか信頼性に欠けるお化け退治屋っぽい名称が聞こえたような何か分かったのか？」

「もうちょい待ちなさい、今インストール中だから……………（プログレスバーっていつもてきとうなのよね）……………、やっと完了したわね。えーっと、マップアプリ？」

地図、とな？

つてことは、ピラミッドの場所が記載されているのだろうか？それだったら話は簡単だ。

「砂漠の地図みたいね」

アルフォンには砂漠地帯の地形図と、波紋が広がるように赤く点滅する光点が映し出されていた。その点がピラミッドの位置だろうか。

「現在地が分かるアプリを立ち上げるわね……………、これでよし」

二つの同じ地図が重なる。緑の点がわたし達の現在地、赤い点がピラミッドの位置だとすると——なるほど、北に真つ直ぐだね。

「よし、さっそく出発だ！」

「そうね。距離もそんなに遠くな——？」

「どうしたマホツカ」

なぜかアルフォンを凝視しながら固まるマホツカ。電池切れ？

「点が……………消えた？ 違う、何で勝手に移動してんのよ？」

地図を再度確認すると、確かにさっきまで真北にあったはずの赤い点が、正反対の真南に移動していた。

「暑さで壊れたとか？」

「そんなわけないでしょ。かの有名な《メガグラビトン・ショック》並みの耐久テストやってる堅牢タイプの機種なのよ！」

それはすげーな。

「もしかすると、例の噂は本当だったのかもしれないな」

噂？

「このピラミッドは、どうやら移動するらしいんだ」

ええっ？ どこぞの砂漠のお城だよ。

「でも一瞬で移動したわよ？」

「そうだ。まるで幽霊のように突如として現れたり消えたりするらしい」

幽霊船ならぬゴーストグレイブですか。世界には不思議が多すぎる。

「とにかく地図通りに歩こう。移動される前に着けばいいんだし」

その考えは、甘かった。

「そうね。目標は南よ！」

と、わたし達はとりあえず地図を頼りにピラミッドへと向かった。

十分後。

「移動したわ？ 東よ！」

二十分後。

「また移動したわ？ 今度は西よ！」

三十分後。

「むきー！ また移動したわ！？ 今度は真南よー！」

四十分後。

「んががあ！ 何で着く寸前で移動すんのよ！ 今度は北西よー！」

一時間後。

「ま、また……移動したわ。次は……東……（ドサ）」
つて、マホツカが倒れた！

「くそっ、これでは無闇に体力を消耗させるだけだ」

「どうやら、わたし達のことを感知しているように思えるな」

まじすか。どんだけシャイなピラミッドなんだよ。もしくは建造主はピンポンダッシュの被害経験があるに違いない。

「どうする勇者、分散するか？」

んー、

「いや、それは無理じゃないかな。結局誰もいない方向に逃げられそうだし」

わたし達の存在を感知しているのなら、それを掻い潜る手段を考えないと……、

！　　ピキーンと豆電球が点きました！

「マホツカ、透明になれる魔法とかない？」

「ぜえ……ぜえ……え？　透明になる魔法？　そんな便利なものがあるわけ……あるわね」

「おおー！　それじゃ是非お願いしまっす」

「悪いけど、その魔法は絶対に使用しちゃいけない暗黙のルールがあるのよ」

え？　何で？

「知らないわよ。ワタシの師匠がそう言ってたの。だから無理」
えー、けちー。

「透明になるか、それならわたしに任せろ」

おっ、盗賊に策有り？

「ふっ、特別に見せてやろう。盗賊の七秘術がひとつ《木の葉隠れの術》だ！」

ハッ！　という掛け声と共に両手で印を結ぶと、どこからか深緑な木の葉が舞い乱れた。

「これで問題ない」

葉っぱがどこかに消えると同時に、わたし達は光を屈折しない身

体になっていた。すっげ、《カイバル湖》もびつくりだ！

「こ、これがあれば、あんなことやそんなことが……むふふふ」

「何しょーもないこと考えてるのよ。唇の隙間から煩惱ぼんのうが見えてるわよ」

おっと、いかんいかん。

それにしても、是非ともご教授願いたい術だな。

しかし、その前に確認しておかなければならないことがある。

「ねえ、この術ってさ、秘術というより『忍術』だよな？」

「さあ、効果が切れる前に行くぞ」

くわっ、無視された。

汚いさすが盗賊きたない！

??・名もなき王墓のガーゴイル（ズ）

「ダンジョン・イン！」

透明になったことで無事四角錐の巨大なお墓へと到着することができた。

ここまでの道のりはほーーーーんと長かった。まじ長かったよ。だが、ここで気を緩めている場合ではない。本番はこれからだ。《黄金の爪垢》を手に入れるために、僧侶ちゃんを取り返すために、気合入魂！ 兜の緒を締めなければ！

「みんな、いくよ！」

わたし達がいる場所は、正確にはダンジョン内部ではなく、ピラミッドをぐるりと囲う廊下だ。そしてこれから内部へと――、

「待て勇者！」

「げふあっ!？」

入り口に向かって歩き出そうとしたわたしを戦士が横から突き飛ばした。な、なぜ!？

「ピラミッドと言えば『畏の聖地』と呼ばれるほどのダンジョンだ。こうやって――」

と、入り口に向かって石を投げる戦士。

「用心しながら一歩ずつ確実に歩を進める必要がある」
いや、それ用心しすぎだろ！

「落とし穴、流砂の床、針の天井……などなど例を挙げれば枚挙に暇がない。どれも古典的な畏だが、ゆえに油断が生じる。数多の財宝に目が眩んだ墓荒らし達が畏によって命を落とした事例はたくさんある」

戦士が言っていることは一理ある。

そう言えば、そんだけトラップ仕掛けておいて、建造に駆け出された人たちはよく大丈夫だったよね。それとも何人かはやつぱりちやっただのかな？

「ワタシが仕入れた情報だと、全部の宝箱にミイラモンスターしか入ってなかったって聞いたわよ。幾人もの財宝に目が眩んだ墓荒らしたたちが回復薬切れになったとか」

宝箱じゃなくて、ちゃんと棺桶に入れといてあげようよ。死人に鞭打ちすぎでしょ。

「わたしの諜報活動の結果によれば、財宝は存在しても手に入らないケースがほとんどらしい。万余の財宝に目が眩んだ墓荒らし共が最後の最期で罠にはまるらしい。だが『ちゃっかり者属性』を身に付けている者は、一掴みの宝石を得られて脱出できるとの統計だ」
「なんじやいそら。それと財宝に目が眩んだ墓荒らしってどんだけいるんだよ。」

「まったく、みんなして心配性なんだから」

確かに内部には危険な罠が張り巡らされているのかもしれない。
「ただどまだ入り口前だよ、エントランス前ですよ。そんな心構えでは中に入ることすら――、」

ビュッ！ と空気を焦がすような音！！

「ほわちゃっ！」

突然、死角から熱の線がわたしに襲ってきた。リンボーダンスさながらの姿勢で、すんでのところでかわす。熱線が床に当たると、その部分が焦げて真っ黒になった。まじ危ねー。

「敵か！」

しかし、それらしい姿も気配もない。

「気を付けろ、あの石像だ」

盗賊の言葉に、入り口の両脇に配置された二つの石像を見る。悪魔の姿を模ったその片割れの目には赤い光が灯っていた。あれが巷間で話題の《目からビーム》なのか！

「ガハハ、今の攻撃を回避するとは、なかなかやるな」

「グハハ、少しは楽しませてくれそうでありよりだ」

石像が喋った！？

ガーゴイルAが 現れた！
ガーゴイルBが 現れた！

ただの排水用のオブジェクトだと思っていた二体の石像は、ゆっくり動き出すと両翼を広げて飛翔した。

「ふっ、悪趣味な門番だな」

うん、確かに。

「エサ代には困らなさそうね」

うむ、確かに。

「二体同時か。相手にとって不足はなさそうだな」

戦士は愛剣である鋼の剣を、盗賊は二本の小太刀を構える。

二週間ほど前のわたしはモンスターを前にして臆していた。だが、魔王との戦いを乗り越えた今では、これぐらいで取り乱すことはない。

「わたしと戦士、それと盗賊でAを攻撃！ Bはマホツカ、ちゃちやつと倒して！」

「A？」

「左の奴か？」

「B？ 右の方をやればいいのね？」

「そゆこと」

あーそつか。みんなにはコレ見えないんだっけ。

「いくよ！ 戦士、盗賊」

「いいのか？ あの魔法使い一人で」

要らぬ心配だよ。

『グハハ、舐められたものだな。こんな小娘一人が相手とは』

「あん？ ナメてるのはアンタの方よ。石像は石像らしく、黙って固まってなさい！」

二体相手であろうと、マホツカがいれば一体はいないも同然だ。

「侵蝕する絶氷の空気よ、おしゃべりな番犬もどきを黙らせなさい！」

何だかな……、上の句はいいのに、下の句はどうにかならんですか。

「氷結せよ！ 《アブソリュート・レイド》！！」

「又オツ！」

魔法の攻撃対象であるガーゴイルB周辺の空気が一瞬で絶対零度に変化すると、ガーゴイルBを氷の牢獄へと閉じ込めた。

「ほい、終了」

マホツカがパチンツと指を鳴らすと、氷が中のガーゴイルBごと砕け散った。

「残りはまかせたわよ」

戦闘開始から一分経たずして片方を撃破した。よっしゃ、残り一体！

「氷の魔法……、たったの一撃とは」

でも一発しか使用できないんだけどね。

「こちらにも負けてはいられないぞ！」

戦士の力ツに、剣を握る手に一層力を込める。

「てりやっ！」「はあっ！」「はっ！」

勇者の 攻撃！

ガーゴイルAに 34のダメージ！

戦士の 攻撃！

ガーゴイルAに 108のダメージ！

盗賊の 攻撃！

ガーゴイルAに 54のダメージ！

ガーゴイルAに 6のダメージ！

うーん、やっぱりわたしが一番弱いのか。

それにしても、盗賊もなかなかやりますね。さすがは一人旅をしているほどはある。

でも、余計なおせっかいかもしれないけどさ、『名状しがたい』

方の小太刀は装備を取り替えるべきなのでは？
『薄汚い賊共が、喰らうがいい！』

ガーゴイルAの 攻撃！

クリティカルヒット！！

盗賊は 53のダメージを受けた！

と思つたら 攻撃を回避していた！

「ふつ、《身代わり術》だ」

ガーゴイルAの攻撃が盗賊にクリーンヒットしたと思つた瞬間、どこから出現した丸太が攻撃を代わりに受け、盗賊はいつの間にかわたしの隣に立っていた。どこに隠し持ってたのそんな物？

『ガハハ、見た目に反して腕は確かのような』

？

片割れを倒され、自分も圧倒的に不利な状況なのに、随分と余裕だな。

「ただのブラフだ。一気に止めを刺すぞ！」

その勇猛果敢さは、昨日のポーカーで發揮してほしかったよ。

「まっ、変な攻撃を仕掛けてくる前に倒そ——」

ビュッ！ と空気に穴を空けるような音！！

「ひよいやつ！」

注意がほぼガーゴイルAに向いていたところに、熱線がどこからか再び襲い掛かる。流れるような無駄のない無駄な動きで体を折りつつそれをかわす。まじ危ねー！

「ど、どこから！？」

ガーゴイルBが 現れた！

ガーゴイルBの 攻撃！

勇者は 攻撃を回避………なんですんだよ、空気読めよ！

うぜー、余計なお世話だ！

『グハハ、おいしいおいしい』

「えー！？ まだいたの？」

『ガハハ、さあどうした』

あわわわわっ！ どうすりゃいいの、どうすりゃいいの！？

「慌てるな、まずは確実に目の前の一体を倒すぞ！」

さっすが戦士、戦闘に関しては冷静で頼りになるな。

そうだ、これしきの事など魔王の繰り返し復活に比べればたいしたことはない。

「おりゃっ！」「らあっ！」「はっ！」

勇者の 攻撃！

ガーゴイルAに 32のダメージ！

戦士の 攻撃！

クリティカルヒット！！

ガーゴイルAに 212のダメージ！

盗賊の 攻撃！

ガーゴイルAに 48のダメージ！

ガーゴイルAに 10のダメージ！

ガーゴイルAを 何の面白みもなく倒した！

無視無視、ここはツツコミを一時的に封印しよ。

「よし！ そいじゃ追加分もこの勢いで倒しま——」

ガーゴイルAが 現れた！

「うそでしょ！？」

「む、無限ガーゴイル……だと？」

造形がまったく同じな石像モンスターがまたまた現れた。

「まさか、《分身の術》なの……か？」

「それはない(きつぱり)」

しっかし唐突に現れたよね。もしやピラミッドに配置された石像
全てが敵意を持って襲ってくるのか？

でもぐるりと見渡した感じ、この入り口にあるのしかないみたい
なんだけどな……………ん？ よく見ると、アルファベッドが同じじ
やん！ ってことは…………、

「もしかして、復活しただけ？」

『ガハハ、よくぞ見破ったな、賊よ』

だから、賊じゃないって。

『グハハ、そうだ、我らこそが——』

ガーゴイルA・B改め

ガーゴイル・ブラザーズが 現れた！

ブラザーズだって？

「兄弟なの？」

『ガハハ、我らは血ではなく石を分けた兄弟にして、一心同体の存
在！』

『グハハ、片方が倒れようと、すぐに復活できるのだ！』

う、うぜ…………。

「面倒なモンスターだな…………」

「ふっ、ならば二体同時に倒せばいいだけの話だ」

そっか！ だったら——、

マホツカの「とつとと倒しなさい！」という野次を聞き流しながら、
わたしは勇者の力を使用する。

「《雷の狂化魔法^{バーサーク}》！」

二体同時に相手しなければならぬのなら、短期決戦で終わらせ
る！

「だあっ！！」「はあああっ！！」「はっ！」

勇者の 攻撃！

ガーゴイル・ブラザーズ（兄）に 48のダメージ！

ガーゴイル・ブラザーズ（兄）に 55のダメージ！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）に 60のダメージ！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）に 49のダメージ！

戦士の 攻撃！

ガーゴイル・ブラザーズ（兄）に 91のダメージ！

盗賊の 攻撃！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）に 50のダメージ！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）に 7のダメージ！

よし、こうやって均等にダメージを与えていけば――、

『ガハハ、甘いぞ賊共が。頼んだぞ弟よ！』

『グハハ、任せてくれ兄者よ！』

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）は 融合をした！

ガーゴイル・ブラザーズ（兄）は 体力が全回復した！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）は 朽ち果てた！

ガーゴイル・ブラザーズ（兄）は ガーゴイル・ブラザーズ（弟）

を復活させた！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）が 復活した！

これぞ美しい フラタニティ！

はあ！？ なんじゃそりゃ？

せっかくダメージを与えたのに、こんなのどうしろってんだよ。

『ガハハ、墓荒らし風情が、ここでミイラの仲間入りになるのだな』

『グハハ、安心しろ。立派な棺桶を用意しておいてやる』

うう、やばい。

「ふっ、墓荒らし風情とは笑止千万。それでも遊びで墓荒らしをやっているわけではない！」

そんなこと言明されても。それと、わたし達三人は墓荒らしじゃないからね、盗賊はそうかもしれないけど。

「見せてやろう、盗賊の七符術のひとつを！」

符術？

「砕け散れ、《爆砕符》！」

盗賊は御符のような紙切れを投げつけた。

「ウオ？」

ガーゴイル・ブラザーズのどっちか（見た目同じだから分かんない）の額に、紙がペタリと貼り付く。

「発！」

「？ ドギャピーーーーーー！！！」

おわわっ、いきなり紙切れが光を放つと、石像が言葉通りに爆砕した。ってええ！？ ただの紙切れじゃないの？

「貴様、よくも弟を！ すぐに復活してや——」

「遅い！ 《爆砕符》！」

「又オ？ デイギャパーーーーーー！！！」

断末魔を上げながら兄も石屑と成り果てた。

「恐ろしい術だな……」

「何だかトラウマを覚えそうね……」

しばらく破片となった元モンスターを眺めていたが、バラバラになった石の欠片は元には戻らなかった。

「ふっ、雑魚が」

盗賊さん、マジこええっす。

??・第一層・やっぱり罨には御用心？

下品な笑いをする石像兄弟を倒したわたし達は、やっとピラミッド内部へと進入した。

まず手始めにお出迎えしてくれた第一層は、狭い通路が真っ直ぐ延びるフロアだった。人が一人分通れるぐらいの幅しかなく、天井も低い。圧迫感で息が詰まりそうだ。

それと敵に挟み撃ちされたら嫌だな。戦士でなくとも慎重に進みたくなる。

だが、そんなことは想定範囲内だ。ツツコミどころは別にある。「随分と明るい内部だな。これならカンテラを使う必要もあるまい」

「そう……だね」

「そう……だな」

「そう……よね」

盗賊のごく自然な感想に、わたし達三人は口を揃えて相槌を打つ。

「灯りが一切見当たらないな。こういう仕組みなのだろうか」

「えー……つと、気にしたら負けだと思う」

「？ 何か知っているのか」

いえ、別に。

精霊の洞窟と同じく親切設計この上ないダンジョンだな、このピラミッドも。グッドなデザインの賞に選ばれた有名仕様なのだろうか。

「ふっ、まあいいか。探索するのには好都合だ」

「そうだよな、電気料金をわたし達が払うわけじゃないし」

そんなことよりも、率先して先頭に立った戦士が、さっきから通路の前方に石を投げては罨の有無を確かめているのが気になる。そこまで心配する必要ないんじゃない。

と、転がっていく石が突然消えた。

「落とし穴？」

一本道の通路を進むと、六角形の太い柱が天井を支えるひらけた場所へとたどり着く。

そこにはメタボな人でもすっぽり落とされそうな大きな穴があった。穴が深いのか地下が暗いのか、穴はまるでインクの水溜りのように不自然なまでに黒かった。

「かなり深そうだな」

試しに石を落としてみると、落下音がいつまで経っても聞こえてこない。

「でも、こんな分かりやすい落とし穴に引っ掛かることなんてないでしょ」

「そうだな、これに落ちるなど愚の骨頂だな」

「そうよね、これに落ちるなんてバカの極みだわ」

「そうだな、これに落ちるとは忍びの恥……おっと、盗賊の恥だな」
もうバレバレなんだから隠す必要はないと思うけどな……（ツツコ

ミ待ち？）

その話題はとりあえず脇に置いて——先に重要な問題を片付けなければ。

「どうやら、分かれ道みたいだね」

二本の柱の間に落とし穴がある分岐点には、そのまま直進する通路の他に、左右それぞれ枝分かれた、これまた細い通路があった。今回は地図がないので選択に迷うところである。しかし——、

「こーいうときは、ずばり『左手の法則』でしょ！」

時間はかかるかもしれないけど、下手に進んで迷うよりはましだからね。

「その法則は当てになるのか？」

なるなる。瞳の色が変わる人のお墨付きだし。

「そいじゃ、さっそく左手を壁に当てて進みましょう」

と、左側の通路に足を踏み入れた瞬間、足裏から嫌な感覚が起る。

「？　ぎよえびばえーーーーー！！」

わたしの全身をビリビリの衝撃が血液のごとく隅々まで流れる。

「これはもしや、電流床か？」

「そうみたいね。何万ボルトぐらいあるのかしら？」

「実に恐ろしい罠だな」

「って、何でもみなして冷静に分析しているんだよ！

誰も助けてくれなかったので（助ける側も危険だから仕方ないけど）、自力で電気が流れる通路から離脱する。

「うげー、死ぬかと思った……」

「いや、普通は死ぬかと思うが」

「さすがは勇者だ」

「便利な身体ね」

電気や雷ならわたしはへっちゃらな身体なんだよね。まじで命拾いしたよ。初めて勇者に生まれてよかったと思えたかもしれない。

それに身体が軽くなったような気がする。充電完了？

「左の通路は電流の床か……。やはりこのダンジョンには危険な罠が仕掛けられていることが分かった。ここからはより周到に進まなければならぬぞ！」

戦士は右側の通路を選ぶ。わたしの被害を考慮してか、入念に足で床を叩きながら一歩ずつ亀の歩みで進む。日が暮れるよ、それじゃ。

「ふむ、右の通路には何も罠がないようだ——」

と、戦士が両足を揃えた刹那、床からカチツと音が鳴った。

「？　ぬおはあつ！」

突然床が爆発を起こし、戦士が閃光と火花が混ざった黒煙に包まれる。

「これはもしかして、地雷床？」

「そうみたいね。TNT火薬何キロ分ぐらいあるのかしら？」

「実に危険な罠だな」

「って、冷静に分析している場合じゃないよ！

「こはっ、こはっ。こ、これしきの衝撃など露程も痛くなどない！」

「いや、普通は重傷を負うと思うが」

「さっすが戦士だ」(言葉に多少の強がりが含まれているっぽいけど)

「無駄に頑丈な身体ね」

「しかし電流床に地雷床のトラップがあるとは。どうやって進めばいいの？」

「まったく、アンタたちには難儀ね。こうやって宙にいればなんともないのに」

天井近くまで高度を上げるマホツカ。一人だけずるーい。

「ふふー、ん？ 何かしらコレ？」

天井から蜘蛛の糸ならぬ一本のロープがなぜか垂れ下がっていた。

「何かのスイッチかしら？ 気になる、気になるわね……」

「待ってマホツカ！ それを引いちゃ——」

「えーい、グイっとな！」

「……あっ……」

マホツカは何かの衝動に駆られたかのような感じでロープを思いっ切り引っ張った。

「？ どがんばっ！？」

突如天井がパカッと開くと、大きなタライが降ってきてマホツカの頭頂部に直撃した。

「これはもしかして、ド。フ？」

「そうみたいだな。何ボケ分の笑撃があるのだろうか……」

「実に危険な罠……なのか？」

この罠に関しては冷静に分析を行う必要があるそうだね。

「何なのよ、このアホな仕掛けはー！！」

どうやらとんがり帽子のおかげで大事には至らなかったようだ。

それにしても、上からタライを落とすとは、分かっているな、建造主よ。

「左右上全部駄目っぽいから、素直に真っ直ぐ進もう」

「そうだな……」

「そうみたいね……」

「……………じー。」

「……なぜ三人してわたしを見つめているんだ」

「いや、だって、ほら、順番的に次は盗賊でしょ。ささ、どーぞどーぞ。」

「ふっ、畏を恐れてダンジョン探索ができれば」

「おおっ、何と頼もしいお言葉！」

と、盗賊が中央のルートに足を踏み入れた矢先、突如狭い通路に一筋の白く光る線が真横に引かれた。それが通路への侵入者——盗賊に向かって迫ってくる。

危険を感じたのか、盗賊は懷から取り出したクナイっぽい投げナイフを白い光線に向けて投擲する。すると線に当たったナイフが真つ二つに切断された。

「っ！」

迫り来る凶器を盗賊は屈んでやり過ごす。

だが、それで終わりではなかった。盗賊がさらに数歩通路を進むと、再び引かれた光線が襲い掛かってくる。

「これはもしかして……何だろ？」

「見ての通りじゃない。レーザートラップよ」

「「レーザー？」」

「通路の奥に台座があるけど、あれが解除スイッチのようね」
「相変わらず訳分からんことを平然と解説するマホツカ。」

そのレーザーとやらが、今度は足元の高さで盗賊へと迫った。

跳躍してかわそうとした盗賊であったが、いきなりレーザーは上へと軌道修正する。

「くっ！」

盗賊は天井にあった小さな突起部分を掴むと、身体を持ち上げて紙一重でレーザーを回避した。あ、危なかった。

「ふっ、これしきのことだ」

さらに一步、台座までもう少しのところで、三度レーザーが発生

する。

「これを避けさえすれば――」

その希望が絶望に塗り変わる。レーザーが通路の幅目一杯に網の目状に広がったのだ――回避する隙間など虫の通り穴ほどもない。

「盗賊――！」

狂気のレーザーが盗賊の身体をサイコロステーキのように切り裂いた――と脳裏にトラウマが焼き付けられようとしたまさにその時、盗賊が丸太に代わった。

「ふっ……、間一髪だったな」

と、奥までたどり着いた盗賊が台座のスイッチを押して仕掛けを解除する。

無残に木屑となった丸太を見ると、先のガーゴイル戦での攻撃痕が残っていた。使い回しっすか？

「くっ、これでは《身代わりの術》はもう使えないか」

まあ、何個も持ち歩けなさそうだからね、って一個も無理だろ！
？

??・トレジャーボックス2　もしも鍵が掛かっていたら

これで何個目になるのだろうか。もしモンスターが入っていてもすぐ反応できるよう剣を構える戦士を尻目に、盗賊が通路の小部屋にあった宝箱を開ける。

「くっ、また空箱からか……」

ガチャリと音を立てながらフタが開く。

だが中身は他の宝箱と同様に、古びた空気しか入っていなかった。どうやら既に、過去にここへと訪れた墓荒らしが持ち去ったようだった。

「やはりこの貼り紙通りなのか……」

盗賊は憎々しげな表情で壁の貼り紙を睨み見る。

『ヌンヌンヌン

現金になりそうな財宝は
すべて俺様が頂いたぜ!』

どこぞの馬の骨だか知らないが、目ぼしいお宝を奪っただけでなく、あまつさえそれを自慢するかのような書き置きを残しておくとは、何とも腹立たしい。

「随分とふざけた輩だな」

「もしどこかで会ったらぶん殴りたいわね」

ほんとだよ。自己満足にも程がある。

しかしまずいな、《黄金の爪垢》が取られていないか心配だ……。まずいな、アレが奪われていないか心配だ……」

?

「アレって何のこと?」

「! いや、何でもない。ただの独り言だ」

独り言ねえ。盗賊もわたしと共通な心配事を気にかけている様子

だな。

そう言えば、盗賊ってピラミッドに何の用事があるんだろう。もしかして同じブツを狙っているとかないよね？

「こっちの宝箱は色が違うわよ」

釣竿袋の上で退屈そうに胡坐をかくマホツカが見つけた宝箱は、確かに今まで開けてきた、くすんだ赤色の安っぽい木枠の箱ではなく、黄金色で複雑な紋様が描かれていた。

「ん？ こっちにも貼り紙があるわね」

まさか、これも開封済みなのか？

『なぜこの宝箱は開かないんだ？

いくら鍵が掛かっているとはいえ、頑丈過ぎるだろツ！？

くそツ、開け！ 開けゴマちゃん！ 開けチューリップ！ 開け

ポンキッキー！！』

何歳だよ、この人。

「どうやら未開封のようだな」

「鍵付きなんて、レアなアイテムが入ってそうね」

レアなのはいいんだけど、わざわざ大事な宝をこんな普通の部屋に放置しておく必要性があるのだろうか。まあ、ロマンなら仕方ない。

「でも、どうやって開けるの？」

「ふふん、もちワタシにまかせなさ——」

「「やめろっ！」」

「ちよっ！ 二人して何で邪魔するのよ？」

わたしと戦士で 그레이さんよろしくマホツカを左右から拘束する。そりゃそうだ、前回みたいに煙と埃まみれは御免こうむりたい。

「いらないのなら、わたしが貰うぞ」

そう律儀に断りを入れながら、盗賊は宝箱に挑むように前に立つ。動作が板に付いているといいますか、風格があるといいますか。き

つと今まで開けてきた宝箱の数など覚えていないぐらい盗賊業に進^{しん}してきたのだと窺える。あり、褒め言葉かこれ？

「開けられそう？」

「ふっ、わたしを誰だと思っている。磨き上げられたピッキングスキルを披露してやろう！」

おまえ、ただの泥棒だろ……。

ピッキング技術なんていったいどこで身に付けたのやら。せいぜいゾンビ屋敷からの脱出にしか役に立ちそうにないのに。

「では、いざ！」

スキルが足りない！

スキルが足りない！

スキルが足りない！

……………、

えーっと。

「くそっ、なぜ開かない！」

いやー、スキルが足りていないっばいですよ、盗賊さん。

「開けられないのなら、張り紙の人と同じく諦めるしかないね」

「盗賊道とは、諦めぬことと見付けたり！」

つい最近、どっかで似たような言葉を聞いた覚えがあるな。

「盗賊の夢はひとつだけ…… 宝箱を開けたい」

オッサンやらイケメンに同じこと言われても、全っ然切なくないっすよ。

「宝箱を開けられるのは、開けようとした者だけだ！」

うん、まあ、そうだね。宝くじも買わないことにはアタリもハズレもないからね。

「ふっ、こうなれば仕方がない。見せてやろう、盗賊の七消耗道具のひとつ——」

「ただ、『七』って数字が好きなんだよ！？」

「《デュプリケート・キー》！」

盗賊が懷から取り出したのは、キーというには少し遠い、ただの細長い棒だった。

「この道具は鍵穴に挿すことで、その鍵穴に合致した形状に変化するのだ」

おおつ、それはすごい。

「そんな便利なアイテムがあるんだ。どうやって手に入れたの？」

「それは秘密事項だ。悪いが宇宙人にでも聞いてくれ」

どゆこと？

「さあ、中身とご対面だ」

盗賊はキーを鍵穴に挿す。しばらくするとキーが変色して作成完了を告げた。

盗賊が複製された鍵を回すと、硬く閉じた宝箱のフタが熱せられたハマグリのように勝手に開いた。

はたして、どんなお宝が眠っているのだろうか――、

盗賊は 《不思議なタマゴ》 を 手に入れた！

「何だこれは？」

「そのまんまタマゴだね……」

ニワトリ以上ダチヨウ以下の大きさで、迷路のような模様が殻に刻み込まれていた。

「どうするの、後で食べるとか？」

「むむ、扱いに困るな……」

盗賊は悩んだ末、とりあえず後でじっくり考えろと言ひ、懷にしまった。

マホツカもそうなんだけどさ、どうしてポイポイツと懷からいろんなアイテムを出したりしまえたりできるわけ？ そっちの方が不思議だよ。

??・第二層・アイテムの上手な活用術

錠の仕掛けが施された赤い扉の部屋にて、わたしと戦士が扉から左右へ等間隔に位置する床スイッチの上に立つ。

同時にスイッチが押されていることが認識されると、押しても引いても叩いても微動だになかった扉が、解除音を鳴らしてフワッと消滅した。

「よし、この部屋も解除完了」

トラップだらけの第一層から階段（無駄に手すり付き）を上って次の階層へと進んだわたし達一行。

「左右離れた位置にあるスイッチか。《分け身の術》がないと一人では解除が困難だな」

顎に手を当てながら盗賊がボソリと感想を漏らすように、ピラミッド第二層はヘンテコな仕掛けが盛りだくさんあるフロアだった。今みたいな床スイッチであったり、同じ色を二つ組み合わせると消える謎ブロックであったり、カラの宝箱を特定のパターンに開閉するであったりと、いちいち頭を使って謎解きしないとならないので、進むのにやたらと時間を要する。

何度も言うつようでくといけれど、絶対に建造中フロアの行き来に困っただろ。

「また、扉か……」

うんざりした様子の戦士。せっかく扉を越えたのに、その先の部屋にも同じ形同じ色の仕掛け扉がデーンと待ち構えていた。

「これで何部屋目よ……」

「確か、八だな」

わざわざ数えていたんだ、盗賊。

ピラミッドは構造的に、上の階層ほど面積が狭い。第一層の広さから考えるに、第二層は半分ぐらい踏破したかな。確か下では落とし穴のあった分岐点に差し掛かった辺りだ。

「まだまだ先は長そうだね。」

「メンドーね。いつそ壁を破壊した方が早いんじゃないかしら？」

「試してみたいけれど、建物自体が崩壊する恐れがあるから無しで見たところ、床や壁にスイッチの類はなさそうだな」

「おそろく、あれが解除スイッチだろう」

盗賊の指先をたどると、やや離れた場所に半透明で灰色の石塊が、台座の上に固定されていた。宝石のようにきれいに磨かれており、頂点は三角錐になっている。

「あの石が？」

「ああ。似たような仕掛けを別のダンジョンで見たことがある。衝撃を与えれば作動するカラクリのはずだ」

「なーんだ、随分と単純だね。」

「では、さっそく――、」

「つて、おおっと？」

石塊スイッチの場所までは床がなかった。《メタボスライム》でもすばつと落とされそうな大きな穴となっている。これでは壁や天井を這っていくしかなさそうだ。

でも、そんな蜘蛛男みたいなことをする必要はない。

「マホツカ、ひとつ飛びお願い」

宙に浮いているのなら、落とし穴などないようなものだ。

「むむう……パスーで」

タライトラップが余程堪えたのか、マホツカはあれから釣竿袋で飛んでいなかった。

気持ちとは分かんなくてもないけど、いかにも怪しいロープを引っ張った自分が悪いんでしょ。まあ、おいしかったけどね。

「石を投げて当てれば事足りるだろう」

戦士は畏検知で使っていた《石ころ》を投げる。美しいオーバーフローから放たれた石はストレートで石塊スイッチにヒットした。ナイスピッチ！

「……む、何も反応しないようだが」

石塊も扉も静かなままだった。

「あのスイッチはただの石では反応しない」

衝撃が弱かったとか？

「衝撃はさほど強くなくとも作動するはずだ。だが当てる『物』に問題がある。たとえばこのような……」

盗賊がサツと取り出したのは、レーザートラップでも使用していたクナイだった。

「さっきも投げてたよね、そのクナイ——」

「これは盗賊の七投擲道具がひとつ、《スローイング・ダガー》だ
いや、クナイだよな？　ねえってば？

「はっ！」

わたしの指摘を完全スルーした盗賊は、腕のスナップだけでダガーを投げる。

一寸の狂いもなくダガーは石塊スイッチへ命中した。ナイススロ
ー。

すると、今度はちゃんと仕掛けが作動したようで、石塊の色が灰色から淡いオレンジ色の光に満ち溢れる。連動してか次の部屋への扉が消えた。

「なぜ石では駄目だったんだ？」

「その筋の情報によると『グッズ』認定されている道具でないと反応しないと聞いたことがある。だが、そもそもグッズという単語が何を示すかが分からない。わたしの場合は所持していたクナイ……スローイング・ダガーを当てたら反応したので、今回もそうしただけだ」

スルスルと細い糸を手繰り寄せる盗賊。何をしているのかと思えば、どうやら糸をダガーに結んであったようで、ちゃっかりと穴に落ちたダガーを回収していた。

「まあいつか。解除できるのなら、それでいいじゃん」

先を急ぐため、深い事は考えずに次の部屋へと進む。

「また、か……………」

そこは一目瞭然で仕掛けがあると分かる部屋だった。

細長い部屋には一直線上に並ぶ九つの燭台しよくたいが置かれていた。メラメラと激しく燃える炎は、なぜか熱さが感ぜられず、ススの匂いもしない。

「今度は何だろ？」

「まさか、全ての燭台の炎を消すとか、か？」

「おそらく、そうに違いない」

試しに一つ、布切れを使って消してみる。

「普通に消えたね。熱くもないし、そいじゃ次も——」

だが二つ目に取り掛かろうとしたとき、消したばかりの一つ目の燭台から再び火の粉が舞い上がった。

「あり？」

「また点いたわね」

「ふっ、なるほど。刹那の間に全て消さなければならないようだな」
め、めんどくせ……。

「四人で分担して消すとしても、今の短い時間で二つ三つ消すのは難しそうだね」

それこそ盗賊が口にする分身の術を用いるべきなのか？

「ふふん。こーいうときは、ワタシに任せなさい」

ドンと平らな胸を叩くマホツカ。まさか、氷の魔法で消そうとか思ってないよね？ 加減を知らないマホツカのことだ、燭台ごと全部壊すかもしれない。

懐疑的な視線を向けるわたしを余所目に、マホツカはガサゴソとロープの中から何かを取り出した。

「じゃじゃん、《フリーザーパペット》よー！」

フェルト地っぽい素材でできたファンシーな雪だるま型のパペットだった。縫い目や継ぎ接ぎ部分が見つからないのは、マジックアイテムの証左なのだろう。それと、小枝の腕とバケツの帽子は魔法使いの世界でもお決まりなんだね。

「腹話術でもするつもりなのか？」

「まあ、黙って見てなさいって」

マホツ力は九つの燭台が一直線に重なって見える位置に立つと、パペットを燭台に向けて突き出した。

「それっ」

おそらくパペットに魔力を注いだのだろう。雪だるまの両目が力ツと光ると、口から白い粉雪を吹かせながら、薄氷色の冷気が吐き出される。ちよつとコワ。

ビームの如く射出された冷気は、九つの炎を貫通しながら全て消火させた。

すると、やはり連動して部屋の奥にあった扉が開く。

「ほう、便利な道具を所持しているようだな」

「本来は防災用のマジックアイテムの一つよ。炎しか消さない特殊な冷気を出すの」

一家に一個ほしいね。

「ところでさ、マホツ力と盗賊はいろんなアイテムを持っているけどさ、そんなたくさんのアイテムをどこにしまってるのさ？」

「それは私も気になっていたな。重量だけでも馬鹿にならないはずだ」

いいかげんこの辺りで種明かしをしてほしいところである。

「どこって、《ふくろ》の中に決まってるじゃない」

「どことは、《ふくろ》の中以外にどこにしまえというのだ」

……何ですか《ふくろ》って。

「ふくろはふくろよ。口に入る大きさの物ならいくらでも入って、取り出したいときには、取り出したい物を思い浮かべながら手を入れるとそれが掴めるの」

「旅には欠かせない必需品だな」

そんな便利なアイテムがあったとは。何で教えてくれなかったの。

「どこに売ってるの？ わたしもほしいな」

「うーん、完全受注生産だから、時間とお金が掛かるのよね」

そうなんだ。今は無理でも、いつかほしいところである。

と、わたしは有限な量しか入らないマイバッグの中身を見る。これまでの冒険で入手してきたアイテムが入っているが、そろそろ容量の限界かもしれない。

E ショーテル

E 旅立つ人の服

シンヨーク王家の証

精霊の洞窟の地図

薬草

薬草

毒消し草

焦げた薬草

小ビン（効果が切れた回復の泉の水）

風の精霊の羽

折れたブロンズナイフ

砕け散った翠銀の槍の欠片

「ゴミばかりね……」

「そこまで言わなくても!？」

大事な思い出の品ばかりだ。捨てるなどモッタイナイ!じゃん。

お化けは出るなよ。

「なぬ、これは!」

興味なさ気な盗賊であったが、いきなり目を奪われたようにバッグの中身を覗いてくる。

「面白いものなんて入ってないけど」

「この焦げている薬草、これは——」

ああ、マホツカのせいでウェルダンしちゃった薬草だね。初お宝の成れの果てだ。

「この元薬草がどうかしたの?」

「これは《バーン・ベリー》ではないか」

え？ バーン……何だって？

「《バーン・ベリー》だ。魔法薬の素材として、かなり価値があるはずだ」

こんな真っ黒なのに？ 毒薬か劇薬の間違いじゃないの。

「……知らないのなら、譲ってくれないだろうか」

「まあ、別にいいけど」

わたしが持つていても猫に小判ザメだからね。思い出はプライスレスだけど、盗賊がほしいというのなら、渋る理由はない。

わたしは《焦げた薬草》改め《バーン・ベリー》を盗賊に渡した。「只で貰うのは気が引けるな。代わりといっては詰まらない品だが、これでどうだろうか」

と、盗賊が大きな純白の羽を渡してきた。

《怪鳥の羽》を 手に入れた！

「見ての通り鳥の羽なのだが、それなりに珍しい品だと思われる。アイテム収集家などが欲しがっているかもしれない」

切手マニアならぬ羽マニアですか。いるのかそんな人？

せっかくなので、わたしは《怪鳥の羽》をありがたく頂戴した。もしかしたら何かの役に立つ……わけないか。

??・マホツカ先生の魔法教室　く拳で打つべし!の巻く

「ここは休憩できそうな場所だね」

無意味な仕掛けだらけの第二層から階段（無駄にスロープ付き）を上ると、ちよつと広めの踊り場があつた。

どうせ第三層も疲れる何かが待っているのだから、ここらで一休みしよう。

「篝^{かがりび}火の跡があるな」

「さつきの宝泥棒かしら」

作業員の憩いの場であつたのか、探索者の休憩地点であつたのか、篝火跡の近辺には椅子代わりとしてのブロック片がいくつも転がっていた。

「何となーく火を点けなくなつちやうよね」

寒い冬の日に、暖炉の前で温まりながらうとうとする姿をちよつと憧れていたんだよね。大きなワンちゃんとか飼つててさ、それに寄り添うとか、わっふー！……だけど現実^{じつ}は布の服を『五枚重ね』で耐え忍んでげふんげふん。

「どしたの勇者？」

「うっん、何でもない、何でもないよ」現実^{じつ}はマジで残酷だ。それよつか、火種はまだ使えるのかな？

「この炭の匂い、囲炉裏を思い出すな」

囲炉裏つすかぁ。やっぱ盗賊は東ノ国の人なんですかね。

火で思い出したんだけど、ピラミッドには今のところモンスターが出現しませんね。門番の石像に費用を使い過ぎてしまったのだろ^うか、それとも嵐の前の静けさなのか。いないことに越したことはないけど、逆に不安になる。

まあいつか。それよか休憩休憩。

「マホツカお願い」

「はいはい。ほいっと」

指先一つで篝火跡へと火を灯すマホツカ。うーむ……。

「何よ、じつとワタシの指なんて見つめて」

「いやさ、魔法って便利だよね」

小さな火を熾^{おこ}したり、宙に浮いたり、モンスターと戦うだけが魔法の使い道ではない。

わたしも一応魔法を使える。だけど如何せん理屈を全く理解していないのだ。ゆえにマホツカみたいに他に魔力を応用することができない。

そうでなくとも、やっぱいろんな魔法を使えるようになりたいよね、

「そうだ！ せっかくだから、何か魔法を教えてよ」

と、マホツカに提案してみる。我ながらナイスアイデア♪

ってか何で今まで気が付かなかったんだろ。確実に戦力アップになるではないですか。

「どうなのマホツカ先生」

「ん？ まあ、減るものでもないから、別にいいわよ」

『先生』という呼ばれ方に気を良くするマホツカ。本人は我慢しているつもりだけど、頬が緩んでいるのがバレバレだ。

「魔法だと？ 是非私も覚えたいものだな」

戦士も興味津々のようだ。魔法戦士に転職すか？

目を輝かせる戦士に対して、マホツカはなぜか、高望みの志望校を受験しようとする生徒を見る先生の顔になった。

「見たところ、アンタには魔法の素質ゼロだから、一生無理ね。諦めなさい」

「ぐはっ」

真実の刃にばっさりと一刀両断される戦士。余程ショックだったのか、踊り場の隅にて体育座りをしながらずーんと沈んでしまった。可哀想に……。

とりあえず戦士は放っておくとして、わたしはマホツカ先生指導の下、魔法を一つ覚えることとなった。

「最初だから、簡単なやつでいくわよ」

魔法といえば、やっぱ火の玉を飛ばしたり、雷の矢を放ったりとかが定番だよな。わくてかわくてか。

「一度しかやらないから、よく見てなさいよ」

と、マホツカは手の甲を前に向けながら、色の白い両の拳を力強くぎゅっと握った。

「纏え、《炎の拳帯魔法》！」
セスタス

拳を薄っすらと覆う光が、詠唱とともに細長い帯のように変化する。その帯がマホツカの腕にぐるぐるっと巻きついた。

ん？ セスタス？

「はっ、せいっ！」

シュシュツ、シュシュツと軽やかなステップでシャドーボクシングを始めるマホツカ。

そして手頃なブロック片を見つけると、真上から正拳を叩き込んだ。わたしより細い腕なのに、ブロック片は砂糖菓子のように簡単に碎ける。

「どうよ！」

いや、そんなドヤ顔されましても……。

ってか何で拳？

「あの、できれば遠距離攻撃の魔法がいいんですけど……」

その文句に、明らかに不機嫌な顔へと変わる鉄拳教師。

「ああん？ そんな難しい魔法、今のアンタじゃ無理よ」

ええっ、遠距離タイプってそんなに難易度高いの？ 魔法使いの皆さんたちが杖を振りながらちよちよいのちよいつて使ってそうじやん。

「せめて拳で戦うのは……拳じゃなくって剣があるし」

「剣が折れたときのためよ。覚えておいて損はないでしょ」

いや、まあ、そうだけだよ。

「そんなに遠距離魔法を覚えたいのなら、まずは魔法学のイロハとホヘトを徹夜で叩き込む必要があるわね。言っとくけど、数学や物

理の比じゃないわよ」

うげっ、勉強は嫌だ。

「贅沢言って御免なさい。セスタスでいいです。是非ともご教授お願いします」

「分ければよろしい」

念願の遠距離攻撃魔法はお預けのようだ。まっ、次があるさ。

「で、どうやって発動させるの？」

まさか、口で魔法名を叫べばいいというわけじゃないよね？

ちなみに、わたしの雷の魔法はそんなノリで発動している。何で発動すんだろね。

「魔法はとにかくイメージすることが大事よ！ 拳帯魔法なら、魔力をセスタスへと変化させるイメージを頭の中で思い浮かべるの」
ふむふ……む？

「手は一番魔力を集めやすい場所なの。拳帯魔法はその名の通り拳に魔力を纏うだけだから、魔力を変化させるコツさえ掴めばすぐに行けるわ」

えーっと……。

「ん？ 説明不足だったかしら」

「いや、そうじゃなくって」

マホツ力ってどこことな〜く天才肌って感じだからさ、てつきり「ギューンと魔力をタメて」、「バーンと炎を腕に巻いて」、「ズガーンと殴る！」とか言っていると想像してたんだよね。分かりやすい説明かどうかはいまいち判断し兼ねるけど、案外論理派なんだな。

「魔法は不思議現象じゃなくって、ちゃんと理論に基づいた物理現象よ。それが理解できないで、オリジナルの魔法なんか作れないわ」
さいですか。

「とにかく、まずは習うより慣れろね。複雑なことは考えずに、まずはやってみなさい」

なるへそ。ならば期待に応えて一発で成功してみせようじゃないですか！

わたしは両手に力を込める。イメージだ、イメージ……拳に魔力を纏うイメージを……！

「よし、いくよ！ 纏え、《炎の拳帯魔法》！」
セSTATUS

……、

……、

……？

「あり？ 何も出ないッス」

「何で炎の属性なのよ。アンタが使えるのは雷の属性でしょーが」
やっぱそうなんだ。

でもさ、それならそっちでお手本見せてくれればいいのに。

「ワタシは雷の属性はあんま得意じゃないの」

そうなんだ？ その割には、精霊王や魔王相手にめっちゃ強烈な雷の魔法をお見舞いしようとしてたよね。

まあ、マホツカも何だかんだでわたしと同じ年だからね。苦手や嫌いなものの一つや二つはあって当然ってことが。

「では改めて。纏え、《雷の拳帯魔法》！」
セSTATUS

……、

……、

……！

パチパチつと、冬場の静電気並みの微弱な雷が手の甲で踊った。

「まあ、誰だって最初はこんなものよね……」

言葉とは裏腹に、いかにもできない生徒を見る教師の顔をするマホツカ先生。そんな目でわたしを見ないでー！

「し、仕方ないじゃん。魔法なんて理屈を知るのは初めてなん——」

「纏え、《氷の拳帯魔法》！」
セSTATUS

へ？

魔法を唱えたのは盗賊だった。両腕に冷気の帯が巻かれているのがはっきりと視認できる。

「な、なぜ！？」

「ふっ、盗賊とは何も物品だけを盗むに限らず。森羅万象を盗むの

さ」

「どこぞのコピー忍者だよ!？」

「アンタは仮にも勇者なんだから。これぐらいの低級魔法はすぐに出せるようにしなさいよ」

初授業にしていきなり宿題を課せられてしまった。

でもさ、できない子ほどかわいいものはないって――、

「センジンの谷に落とすわよ」

うぐはっ！

??・第三層・逃げる！

キカイヘッドが 現れた！

「いきなり!？」

第三層へと上がった直後、ピラミッド内部では初となるモンスターと遭遇した。

《キカイヘッド》——タマゴを横に倒したような流線型のボディを持ち、生やした四本の手足を地につけて歩行するヘンテコモンスター。メタリックなシルバーグレーの体色からは、血と肉ではなく、オイルと鉄で造られたのだと判断できる。

「随分と奇怪な番犬だな……」

うん、そうだね。（機械なだけに?）

「エサは……いるのかしら?」

うーん、どうだろ。（きっとセルフなんでしょ）

「ふっ、立ちほだかる敵は全て倒すまでだ」

戦わないことには先に進めない。とりあえず戦闘態勢へと移るわたし達。

それに反応してか、キカイヘッドのおそらく目に当たる部分がモリス信号のように数回点滅すると、挨拶代わりの攻撃を先制で仕掛けてきた。は、速い！

キカイヘッドの 攻撃！

マスタードボム！

へ？

キカイヘッドの背中から寸胴型の物体が射出される。白い尾を引くそれは、わたし達四人の真ん中ぐらゐまで飛来すると、落下直前で破裂した。

「うげっ!?!」「ぐはっ!?!」「ぶはっ!?!」「ごわっ!?!」

周囲に赤と黄の混ざったガスが撒き散らされる。

「な、何じゃこりゃ? 目が痛いし、それに舌が――辛い!?!」

パンとソーセージとレリツシュがほしくなる刺激が沸き起こるのは気のせいかな?

「これは辛子なのか?」

「水、水っ!」

「ぬおっ? 頭巾の中にこもった!」

阿鼻叫喚の様相を呈するわたし達。マスタードってそのまんまの意味かよ! 何という対人間には絶大な効果のある攻撃だ。

「くそっ、怯んでなどいられるか!」

ガスが晴れると、どうにか苦痛を我慢してキカイヘッドへと反撃を行う。

勇者の 攻撃!

キカイヘッドに ダメージを 与えられない!

戦士の 攻撃!

キカイヘッドに 12のダメージ!

盗賊の 盗む!

《迎撃ミサイル》を 盗んだ!

か、かつて――!?

「見た目通り、鋼鉄の硬さだな……」

腕が痺れるし、ショーテルが一部欠けてしまった。

だが、そんなことよりも――、

「何でちゃっかり『盗む』なんてやってるのさ、盗賊」

「む? ああ、すまない。つい癖で」

まさに手癖が悪いだな。それと《迎撃ミサイル》って何ぞ?

「また来るぞ!」

キカイヘッドの今度は口に相当する部分が開く。そこからノズル

が伸びてくると、ゴーツと炎が勢いよく噴出された。

キカイヘッドの 攻撃！

火炎放射！

勇者は 燃えた！！

「あつつ、あつちいいい！！」

蛇腹のようにうねる炎がわたしを飲み込んだ。

「だ、大丈夫か勇者？」

全然大丈夫じゃないよ、めっちゃ熱いよ！

しかも説明が「燃えた！！」だけって、簡潔すぎるだろ！

「厄介な敵だな。防御力もかなり高い感触だった」

攻撃も厄介といえは厄介だね。

「ふつ、ならば見せてやろう。盗賊の七符術のひとつ——」

盗賊は素早く三枚の符を取り出すと、キカイヘッドに向けて全て投げつけた。

「くらえ、《龍爪符》！」

ただの薄いペラ紙のはずなのに、符はまるで龍の爪のごとき鋭さを持ち、硬質なキカイヘッドの左前足部分に突き刺さった。

盗賊の 攻撃！

龍の爪が 敵の肉を断つ！

キカイヘッドに 合計102のダメージ！

『ギギギ』

呻き声のような駆動音を鳴らしながら、敵の動きが一時停止する。攻め込むチャンス！

「いくよ戦士、前足に集中攻撃だ！」

「了解した。はああつ！」

「あ、待て二人とも——」

え、何で――、

「ぶべばっ」「ぬおはっ」

盗賊の攻撃でダメージを負った箇所を攻撃しようとしたわたしと戦士であったが、立て続けに起きた爆発三連発によって吹っ飛ばされる。な、なぜ!?

「起爆符を元にした符だ。一定時間経過すると、そして符は爆発する……」

先に言つてよ!!

『ギギギギイ』

爆発によつて左前足が破壊されたキカイヘッドであつたが、右前足一本で器用にバランスを取りながら体を起こす。まだまだ動けるようだ。

「盗賊、符はまだあるの?」

「すまないが数に限りはある。この先のことも考えれば、ここで全て使うわけにはいかない」

だよねー。あんな強力な技がバンバン使えたら反則だよね。

とはいっても、物理攻撃だけでは太刀打ちできそうにない。ここはやはり――、

「ふふん、そろそろワタシの出番かしら」

頼れる四番バッターは待つてましたと言わんばかりに腕をぐるぐると回す。休憩したばかりなので、存分に魔力が有り余っているようだ。

「こんなポンコツモンスター、すぐにスクラップにしてあげるわ」
せめてリサイクルはできる程度にしてあげてね。ゴミは増やしたらダメっすよ。

「天空を統べる赤き竜の息吹よ、雷の槍となりて、敵を滅せよ!」
マホツカの両の手にもものすごい量の魔力が集まるのが肌で感じられた。詠唱の文言が真面目なパターンの場合は総じて威力が高いと、過去の体験が教えてくれる。

そしてわたしの持つ対マホツカ危険信号^{レッドフラグ}がアラートを鳴らした。

「全力全壊でいくわよ！ サンダーフォース——」

「ちよつと待った！！」

「ブリューなつ、とととつ？」

魔力の波動が手から身体へと戻っていく。どうやらギリ間に合ったみたいだ。

「ふー、危なかった」

「ちよつとー、どうして邪魔すんのよ」

「だって、いつもの調子でドカンと魔法を使われると、フロア全体が崩壊して確実に生き埋めになりそうなんだもん」

モンスターは倒せるかもしれないが、わたし達もすぐ後を追うことになるだろう。

「確かにそうだな。塔の屋上といい、城の天井といい、散々破壊してきたからな」

だね。

「おまえ達は、いったいどのような旅をしてきたんだ……？」
その話については時間があるときにじーっっくり語ってあげよう。

だが少なくとも、今はそれどころではない。

「もうちよつと軽めな魔法はないの？」

「軽めって、魔法は夜食じゃないのよ。まったく、しょーがないわね……」

肩透かしを食らい不満を露にするマホツカだったけど、ちゃんと魔法は使ってくれた。

「だったら半分のカロリーのにしてあげるわよ。えーっと、メンディーだから詠唱は破棄、《サンダーフォース・ジャベリン》←←←」
テンションが駄々下がり、すげーやる気なさそうに魔法を唱えるマホツカ。

しかし、その右手には空気を破壊する黄雷の槍が握られていた。
やはりあの詠唱文言は不要なんだね。

「ほいつ、戦士」

「ん？ っておおい」

マホツ力は魔法の槍を戦士へと無造作に放り渡した。

「やっぱ全力じゃないと調子が狂うわね。アンタ代わりに投げなさい」

魔法つて、意外と大雑把なんだな……。

「そういうことか。では、いくぞ——！」

魔法を間接的に使えることに笑みを浮かべる戦士。

後ろに下がると、戦士は軽い助走からタタツとステップを刻み、槍を豪快に投擲した。さっきの石投げといい、やっぱスポーツ万能なのか。

戦士の 攻撃！

雷の槍が キカイヘッドを貫く！

キカイヘッドに 962のダメージ！

キカイヘッドは 機能停止した！

っ、っえー！

機械つて水とか雷に弱そうな印象があるとはいえ、これで威力半分なの？

「ふう、気持ちの良い勝利だな」

「あんな歩く分銅なんか、楽勝に決まってるでしょ」

でも強敵には違いなかった。連戦だけはしたくない。

キカイヘッドが ご期待に応えて 現れた！

「なぜー！？」

ってか誰も期待なんてしてねーよ！

「まだ……いたのか」

「おい、後ろかも来たぞ！」

キカイヘッドが 満を持して 現れた！

ぎゃー！！

「やばいやばいやばいやばい」

「お、落ち着け勇者。取り乱したら負ける戦いも勝利する——む？」
瓜二つのモンスターが二体。まるで前門の虎、後門の狼のごとく、
わたし達は挟み撃ちにされてしまった。となると結末は……。

「どうすんのよ！？」

「言わずもがな、逃げるに決まってるじゃん！」

完全に逃げ道を塞がれる前に、横手に伸びる通路に飛び込むと、
無我夢中に逃走した。

「ちよつ、追いかけて来るわよ！」

絶対に負けられない、命懸けの鬼ごっこが開幕した。

「くつ、見た目にそぐわず機敏な奴だな」

戦士の感想通り、キカイヘッドはさすが第三層の番犬であるのか、
デカイ図体のくせして小刻みにカーブを曲がってくる。ガチャンガ
チャンといつまでも執拗に追いかけてきた。

「階段はどこだ？」

「早く見つけなさい！」

「おい、前からも——」

十字路にたどり着くと、何と四方をキカイヘッドに囲まれてしま
った。やべー！

「盗賊、何かないの！」

七錬金術でも、七錬丹術でもいいから！

「くつ、こうなれば盗賊の七投擲道具のひとつ《アーチン・トラッ
プ》を使つて……」

「それただのマキビシでしょ！」

しかも今さら撒いても遅いから！！

大抵のことは冷静に対処してきた盗賊も、さすがに動揺している
ようだった。

と、キカイヘッドが一斉に火炎放射の合唱を始めようとしたとき、足元が急にへこんだ。

「ん?」「お?」「え?」「む?」

足裏から床を踏む感覚が失われる。つまりは――、

「」「」「うわあああああああ!」「」「」

わたし達四人は竜穴――普通の落とし穴トラップに引っ掛かってしまった。

まさかこんな古典的な罠に――いや待て、これはこれで助かった? 下の階に落ちたところで、謎仕掛けは全て解除済みだ。再び上まで戻るのに時間はさほど要しないはずだ。

「ん?」

徐々に近づいてくる下の階を見やると、そこに待っていたのは、まあ、第一層に戻っても……。

重力に従ってさらに下の階へと落下し続ける。そこで待っていたのは――、

「げっ!」

そう、またしても大きな穴だった。しかもあの穴は――、

「愚の骨頂で――」

「バカの極みで――」

「盗賊の恥――」

の

「」「」「落とし穴!」「」「」

すっぽりと、仲良く四人揃って闇よりも黒く深い穴へと飲み込まれてしまった。

どこまで落ちればいいんだよ――!――!

??・地下層・もつと逃げる！

「どはっ」

「ぐはっ」

「べはっ」

「はっ！」

万有引力にいざなわれる長い旅路を終えたわたし達は、当然のよう
に大地へと激突した。

盗賊だけはウルトラC級の着地を決めたのだけど、そこわたしの背
中の上だから！ 早く退いて！

「いてててて、みんな大丈夫？」

「ああ、どうにか」

「もう、ロープが汚れたじゃない」

よかった、みんな無事のようだ。

「あの高所から受け身も取らずに落下して、おまえ達はよく平気だ
な……」

二十メートル以上は落下したのに、確かに怪我らしい怪我は見受
けられない。

まあ、これしきのこと、今ではZ指定となつてしまったクライム
アクション小説——《馬車泥棒・参》の主人公に比べたいしたこと
じゃないよ。防刃ベストを着ればどこから飛び降りても無傷だ
からね。カナヅチが唯一の弱点だったけど。

「どうやら地下のようだな」

外と同じく硬い砂がむき出しとなつた、ひんやりとした地面。

上の階層と違って地下フロアは薄暗かった。ところどころに設置
された燭台の炎がぼんやりと周囲を照らしてはいたが、視界は非常
に悪い。

「何だか、陰気臭い場所だね……」

「そうね。何が出てきても不思議じゃないわ」

「ふつ、こういう場所にこそ、宝は存在するのだ」

にしても、どうやって上まで戻ろうか？

天井を見上げると落下してきた大穴が見える。地獄の天蓋に空いた地上への抜け穴のように、一筋の光が地下へと差し込んでいた。

「上には太い柱があったはずだ。あそこにロープでも結べば上れるだろう」

「ならば、これを使うか」

備えあれば憂いなしな盗賊は、丈夫そうなザイルを取り出した。

「つてなわけで、マホツカお願い」

「はいはい。言われなくても分かっているわよ」

と、マホツカは釣竿袋に跨るが、なぜか飛び上がろうとしない。

「どしたの？」

「んん？ 何で浮かばないのかしら？」

台風に煽られて飛び方を忘れてしまった少女のように、マホツカが珍しくテンパる。

「魔力切れとか？」

「そんなわけではないでしょ。まだまだ半分以上は残って——」

マミーおとこたち（×9）が 現れた！

「うおっ、モンスター！？」

《マミーおとこ》——全身を包帯でぐるんぐるん巻きにした（された？）人型のモンスターが、音もなく現れた。しかも九体って多すぎ！

「なぜ極端に数が多いときがあるんだ……」

だよね。こんだけ多いと梓に収まらないよ。

落下地点は決して広くない場所だったので、どこかのマラソン大会のスタート地点みたいに渋滞となっている。

「まあいい。ここは倒さなければならぬようだ——！！？」

ミイラといえはのろりと近寄ってくるイメージがあったんだけど

ど、マミーおとこたちは陸上選手顔負けの猛ダッシュで肉迫してきた。(わたし達が四人だからか?)

そのあまりの迫力に戦士でさえ一瞬どきりと身を竦めてしまったのだが、ミイラたちはなぜか目の前まで接近するとピタリと動きを止める。

「はっ!」

一向に攻撃をしてこないマミーおとこに、戦士が遠慮なく攻撃を与える。

「うべあああ」

変な叫び声を上げながら息絶えるミイラモンスター。ようやくにして成仏した肉体は霧散して包帯だけが残される。

「一体一体は雑魚のようだな」

数は多かったけど、敵さんは慎ましい性格のようで、一体ずつしか攻撃してこなかった。

「ふー、何とか片付いたね」

来世では、せめて生けるモンスターになれよ。

それでは気を取り直して、上へと戻る算段を付けようではないか――、

マミーおとこたち(×9)が また現れた!

「ほんと『また』だよ!」

しかもまた九体つて、どんだけミイラいるんですか!

「だから、なぜ……」

まずいな。いくら弱いからといっても、ノーダメージでは切り抜けられない。

「マホツカさん。何かいい魔法ないですか?」

戦士はともかく、わたしと盗賊では敵を一撃では倒せない。

「まったく、枯れた男相手になーに手間取っているのよ。仕方ないわね」

飛ぶのをしばし中断して、マホツカが戦列に加わった。

「烈火の大剣よ、物理で殴るばかりの者たちに魔の力を与えよ！」
そんな言い方はないんじゃないかな……。

「炎を奮え！ 《エンチャント・フラムベルク》！！」

補助魔法っぽいネーミングだな。いったいどのような効果なのだろうか――、

……………。

あり？ 何も起こらない。

「え？ 何で！？」

「やっぱり魔力が切れたんじゃないの」

「だから、そんなわけないはずなのよ……」

さすがのマホツカ先生も、お疲れ気味のようだ。

ここはわたしがやるしかないようだね。一日に何度も使用するの
は少々きつけれど、

「一気に片付ける！ 《雷の狂化魔法》！」
バーサーク

……………。

あり？ 何も起こらない。

「どうした勇者」

あれれ、わたしも魔力切れ？

「どうやら、あの噂は本当のようだな」

噂？ （盗賊って噂好きだよね）

「ピラミッドの地下には、魔法が無効化される仕掛けが施されてい
るらしいんだ」

な、

「何ですって！？」（うぐっ、マホツカに取られた）

だからわたしもマホツカも魔法が発動しなかったのか。

『うばああ』

！？

マミーおとこたち（×9）が 追加派遣された！

契約ミイラ社員募集中！

墓荒らしをやつつける簡単なお仕事です！

死人を募集してんじゃねーよ！

「ま、まずい。みんな一旦逃げるよ！」

今日は逃げてばかりだな……。

「くそっ！ まさかミイラ如きに背中を見せて逃走することになるとは。この屈辱は絶対に晴らす！ その顔決して忘れないぞ！」

いや、包帯巻いているんだから、顔なんて判別できないでしょ。

必死に逃げようとしたわたし達であつたが、死人海戦術によつて、回り込まれてしまった！

「まずいますまずいます！」

「お、落ち着きなさい勇者。取り乱しても太い二の腕は細く——ん？」

せつかく一難去つたと思つたら、また水を背にしたマナ板の上の鯉状態じゃないか。

「ふっ、魂の抜けた死者風情が。盗賊の七遁術のひとつを見せてやるっ！」

もうツツコミはしないよ。つていうか心に余裕がない。

「火に葬られるがいい！ くらえ、《火遁・黒炎灘こくえんだんの術》！」

懷から巻物を取り出すと、それをシュルシュルッと開封する盗賊。巻物には翼のない竜が墨で描かれていた。その竜が紙の中で躍りだすと、大きな口を開け墨色の炎を吹き出した。

「うばあ」「うびい」「うぶう」「うべえ」「ウボアー」

ミイラたちが包帯ごと灰となつていく。すげー火力だ。

「さっすが盗賊、やるー！」

十体以上いたミイラたちが瞬く間に全て火葬されていった。

けれど、なぜか竜は未だ炎を吹き続けている。

「盗賊さん盗賊さん。もういいんじゃないですかね」

だが盗賊は攻撃をやめようとしなかった。

「そ、それが、一度封を解くと効果が終わるまでこのままなんだ……」

な、

「何だと!？」（うぐっ、今度は戦士に取られた）

ミイラだけでは物足りず、砂や壁まで燃やす墨竜。狭い通路であつたため、黒煙があつという間に立ち込める。や、やばい!

「みんな、急いで脱出するよ!」

わたし達は急いで地上への階段を探した。

もう、逃げるのにも疲れたよ……。

??・盗賊の事情

「へつくしょーぬ、はつくしょーん!」
肌を刺す冷たい夜風が吹き荒^{すさ}ぶと、篝火^{かがりび}の炎がゆらゆらと幻想的に揺れた。

「砂漠の夜は冷えるぞ」

気遣いの言葉を掛けてくれたのは、篝火を挟んで向かい側に座る盗賊だ。

「へーきへーき。わたしは生まれてこの方、風邪^{かぜ}を引いたことがないから」

身体だけでは無駄に丈夫なのが取り柄ですから。それに加えて、貧乏生活で鍛え上げられた免疫力に勝てる病原菌などそうそういない。
「風邪は万病の元だ。念のため、それでも飲んでおけ」

「ん、ありがと」

小さめのケトルでお湯を沸かしていた盗賊。「魚」が一杯書かれた湯飲みに、何やら粉末とトロリとした液体を入れる。そしてお湯を注ぐとわたしに渡してきた。

「飲めば瞬く間に身体が温まる飲み物だ」

何だろう、暗くて色がよく分からない。匂いは……どこかツーンとくるものがある。

「お言葉に甘えて、いただきまーす」

と、一口飲んでみた。

「こ、これは――」

ジンジャーとハニーな風味がすごくしますね。

「ああ、生姜湯^{しょうがゆ}だ。隠し味としてハチミツを入れてある」

なるへそ。冷え性に効くって小耳に挟むあの飲み物ですか。

こういうシンプルな味の飲み物は何だか懐かしいな。我が家では山で採れたウィードという名のハーブを、ただ煮ただけのスープをよく飲んでいたからね。

パチパチツと弾ける火の音と、二人が揃って生姜湯を啜^{すす}る音。そんな静かな夜を満天の星空の下で味わっているわたし達。うーん、実に平和だ。

今わたし達がどこにいるかというところ、ピラミッドの外だ。そこでキャンプを張っていた。

黒煙立ち込める地下層から命からがら脱出したら、既に夜の世界となっていた。

疲労もピークに達しており、これ以上の探索は危険と判断して、ここで夜を明かすことになったのである。

あー、ゴメン僧侶ちゃん！ まさか一日で目的を果たせなかっただなんて。寂しくて泣いてないかな？ わたしは泣きたい！

そんないつもと違う夜にて、戦士は周辺の警戒と夜の鍛錬を行うために席を外している。マホツカはグースカと就寝中のため、今は盗賊と二人で暖を取っていた。

ちなみにどこで寒さをしのごうかといいますが、ずばりテントの中だ。それも普通のテントではない。魔法のテントなるマホツカ持参のマジックアウトドア用品なのだ。

外見は二、三人用のノーマルテントなんだけど、中は3LDKのマンションの一室というどっかの借金執事の夢空間が広がっていた。「地下でのことはすまなかったな。わたしとしたことが軽挙妄動だった」

いつまでも続くかと思えた静寂を破ったのは盗賊だった。湯飲み
に視線を落としたまま、自身の反省を吐露した。

「別に気にしてないって、他に逃げる術もなかったしさ」

あのままでは本当にミイラ取りがミイラになるところだった。

しかし、わたしの言葉は気休めにすらならなかったようで、盗賊の肩は重いままだった。

「遁術の巻物も十分に扱えぬとは、取り返しの付かない醜態を晒してしまった……」

それを言うのなら、忍者バレバレな点が真つ先に挙げられるので

は……。

うーむ、ちょっと雰囲気が重くなってきたな。ここは話題を変えよう。

「そ、そー言えばさ、盗賊ってピラミッドにどんな用事があるの？」
ピラミッドまでの道案内人として同行してくれることが仲間になったキツカケだったけど、盗賊もピラミッドに目的があるのは明白だ。

もしもわたし達と盗賊の目的が同じな場合、最悪戦うことになるのかもしれない。それだけは回避しておかなければ。

「ああ、その件か……」

顔を覆った旅装の隙間から見える双眸が篝火へと注がれる。

「たいした目的ではない。ピラミッドに眠ると云われる『鍵』を手に入れるためだ」

鍵？

「そう、ただの鍵だ。とはいえ、それはあくまでも通過点にしかすぎない。わたしが本当に欲しているものとは……」

盗賊は一旦そこで言葉を切る。言おうか言うまいか迷った末、続きを話してくれた。

「わたしが欲しているものとは、我が一族……おっと、一家に代々伝わる武具だ」

代々伝わるとはすごいね。我が家には遺産もヘツタクレもなかったからね。

「わたしが生まれる遥か前に失われたはずなのだが、存在することを突き止めたんだ」

「なるほど、その武具を手に入れるための鍵ってことだね」

「そういうことだ。鍵を入手したところで、本当に大変なのはそれからなのだな」

武具で思い出したけど、わたしも《竜殺鉄塊》を手に入れるロマンがあったんだっけ。まあ、積極的に探そうとは思ってないけど。
「そういうおまえ達はどうなんだ。見たところ、興味本位の墓荒ら

しには見えないが」

「んー、ちよつとゼガスで負債を抱えちゃってね……」

わたしは話せる範囲で盗賊に旅の経緯いきさつを説明した。

「なるほど、仲間のためか」

そうなんだよ。小汚い悪党から可憐で典雅で神！な少女を救わなければならぬのだ。

「あれ、盗賊はずっと一人旅をしてきたの？」

「ああ、当然だ」

どこか寂しげな、しかし強い言葉だった。

一人旅か……、わたしには無理な選択だ。みんながいなければ、絶対に今のわたしはいなかったと思う。

それはモンスターと戦う力という意味だけでなく、精神的な支えもある。

「一人で寂しくないの？」

「一人の方が何かと融通が利く。余計な荷物を背負うのは性に合わない」

それは、孤独な考えだよ。

「でもさ、それならどうしてわたし達の仲間になってくれたの？」

「……それは、なぜ……だろうな」

盗賊は本当に分からないといった様子だった。確かにあのときの一部始終はすごく不自然で唐突だったからね。

「わたしにもよく分からない。ただ、おまえに話しかけられたとき、道案内ぐらいならしてもいいと思ったただけだ」

どこか恥ずかしがるような、ちよつと可愛い感じで否定を混ぜる盗賊。

「あのさ、盗賊がよかったら、ピラミッドの攻略が終わったら——」

「大分夜も更けてきたな。先に休んでいる」

わたしの言葉を遮るためのセリフだった。なぜなら夜はとっくに更けている。

やっぱそこまでは無理だよな。距離を測りそこなってしまった。

「わたし達のテントを使ってもいいんだよ。中はすごく広いし」

「ふっ、そこまで世話になるわけにはいかん」

と、盗賊は自分の一人用テントに姿を消してしまった。

「世話になっているのは、わたし達の方なんだけどな」

誰に言っただけでもなく、呟くように声にした。

やはり類は友を呼ぶ、なのか。盗賊とはすごく気が合うような感じなんだよね。

それは戦士や僧侶ちゃんやマホツカとはまた少し違った感覚だった。まるで昔どこかで会ったことのあるような、懐かしいようで、照れくさい不思議な気分になる。

一時的にとはいえ、せつかく仲間になってくれたのだから、いろいろと話がしたいな。

しかし、それはまずピラミッドを攻略してからだ。

わたしは戦士が戻ってくるのを待ったあと、明日に備えて眠りについた。

銀のロザリオ

日がな一日実に退屈であった。

旅立ってからの一週間が波乱と驚きに満ち溢れた日々であったため、余計に暇であることが際立ってしまう。

そう思う反面、昂ぶった心を落ち着かせたいと少なからず望んでいたのも、結果的にはこれで良かったと思えた。

「もう少し、もう少し……」

一人で使用するには広すぎる部屋には、ダーツやスロットマシンなどの娯楽物が置かれていた。さすがは地下カジノの上に立つホテルなだけはある。

しかし彼女は、暇だと感じつつも、それらのゲームには手をつけなかった。

なぜならプレイヤーとディーラー——人と人との探り合いが介在しないゲームが嫌いだからである。そんな無粋なことに興じるぐらいなら、一人トランプで遊んでいた方がましだった。

よって彼女は、ホテルの一室には必ずといっていいほど机の引き出しに入っているどこかの教派の教典のように、ドレッサーの上にポツンと置かれていたトランプで遊んでいた。

「ふう、次で最後ですね……」

程よい緊張感に思考が引き締まる。

知っている限りのソリティア——一人用のトランプゲーム——をしていたのだが、いつまでも暇潰しができるわけではない。

難攻不落な『ゴルフ』もクリアしてしまい、ついにやることなくなってしまった彼女は、トランプを使ってピラミッドの建造に勤しんでいた。

「これで一番上の段が完成ですね……」

そうつと、残り二枚となったカードで最上層を築こうとしたとき、コンコンと部屋のドアがノックされた。

「ひゃう!？」

「オーナーがお戻りになれました。下のフロアまでお越し下さい」と、扉越しに用件を事務的に伝えられる。

突然の掛け声に手元が狂ってしまい、トランプで作られたピラミッドは上層部からバラバラと崩壊してしまった。

何かを暗示している？　と考えが至るのは心配のしすぎであろうか。

「はい、すぐ行きます」

適当に返事をする、トランプを片付けて準備に取り掛かった。

仲間の敗北によって、彼女は現在ホテル《コルツネオ》の最上階――ゼガスを一望できるゴールドクラスルームに幽閉(?)されていた。負債を抱えているはずなのに、最上級の待遇とはこれいかに。債権者であるオーナーの意図が分からなかった。

衣装棚を開けると、彼女の背丈と年齢に見合ったドレスが数着用意されていた。いつの間に揃えたのかと不思議に思いながら、一番シンプルであった黒のワンピースタイプのを選ぶ。

なぜわざわざ正装に着替えるかというと、これからオーナーと下の特別会員専用のレストランで食事をするからだ。

「うっ……ん、そろそろ切りましょうか」

少し伸びてきた髪を後ろで括り、薄く化粧をして準備万端だ。

部屋を出ると長い廊下が続いており、このフロアの客専用のエレベーターに乗る。降りる階はレストランが営業している二階だ。

レストランの入り口で待機していたウェ이터に特別個室へ案内されると、既にオーナーが座っていた。相変わらず値段の張るブランド物のスーツで身を固めていた。

ウェ이터が椅子を引いて、オーナーと向かい合うように腰を下ろす。

しばらく無言のまま待っていると、食前酒が運ばれてきた。

彼女は未成年であったが、アルコール度数の低いカクテルであったため、ソフトドリンク感覚で飲むことができた。

「西海岸で見つけた一流のシェフだ。味に間違いはない」

「はあ、そうですか」

気のない返事をする。それ程お腹が減っていないのだ。

前菜、スープ、魚料理……と、フルコースではなかったようで、締めデザートが出てきた。オーナーは甘い物が苦手だったのか、彼女の分しか運ばれてこない。

（それにしても、会話を振ってこないですね）

食事中の会話を非としているのか、オーナーは彼女に話を振ってこない。ウェイターによる料理の説明を聞いては、適当に相槌と質問をするだけだった。

説明をするウェイターも、相手がホテルのオーナーとあってか、やや緊張気味だった。そのせいか個室はかなり気詰まりのある空間となっている。

そういった場にはある程度経験がある彼女にとっては、別段苦痛とは思わなかった。強いて述べるとすれば、せつかくの料理の味が落ちてしまったことが残念である。やはり食事とは、皆でわいわい騒ぎながら食べるのが楽しいと、この一週間で改めて思わされたからだ。

「おまえに一つ、訊きたいことがある」

食後の紅茶を嗜んでいたとき、ようやくにしてオーナーが本題を切り出した。

「何、でしょうか」

「その首から提げているロザリオだが、どこで手に入れた」

予想していた質問がしゃがれた声に乗って彼女の耳に届く。

昨日ホテルの前でも同じ質問をされたのを思い出す。あのときは仲間の人たちが割って入ったため流れてしまったが、今はゆっくりと話せる時間がある。

「これは……」

まるで赤子を抱くかのような柔らかい手付きでロザリオをかざす。「この銀のロザリオは、私の曾祖母から譲り受けた大切なものです」

形見の品であつたが、後生大事に首からぶら提げているアクセサリではない。法術を使用する際に用いる優秀な触媒であるのだ。

聞いた話では特殊な製法で創られたとのことだが、彼女は詳しくまでは知らなかった。

「曾祖母の名前は何という」

《セルゴード》の名を出すことは憚^{はば}れたので、上の名前だけを告げる。

「そうか、やはりあの女の物か……」

「！ ご存知なのですか？」

一瞬の逡巡のあと、オーナーの口から再び質問が飛び出る。

「その前に聞きたい。今はどこで何をしている？」

今度は彼女が躊躇^{ためら}う番だった。

「大おばあ様は、二年前に……」

今でもはつきりと覚えている。最後に触れた冷たくなった頬と腕。棺に収まったその姿は、ひどく小さく見えた。

せめて自分が祝言を挙げる姿を見てほしかったと思うのは、やはり贅沢なのだろうか。

「そうか……」

「あの、」

「分かっている。急かさなくてくれ」

オーナーも想うところがあつたのだろうか、軽いショックを受けているようだ。

「いったいこのオーナーと曾祖母はどういう関係なのだろうか。

「予め言っておくが、面白い話ではないぞ」

そう述べながらも、オーナーは昔話を滔々^{うわうわ}と語り始める。

亡き曾祖母が生前どんなことをしていたのかは、些細なことも知りたい。

「あの女……銀髪の似非僧侶^{えいせ}に出会ったのは、今から五十年程前のことだ」

年齢からして、オーナーがまだ少年の頃だろう。

五十年前と云えば、曾祖母が既に法術の体系化を完成させ、祖母に家のことを全部まかせて（押し付けて）旅に出ていたときだ。

「当時のゼガスは、それはクソみたいな街だった。今でこそ世界中から金と時間を持て余した富豪や資産家が訪れる場所だが、昔は金に目が眩んだゴロツキが街中を堂々とうろつく治安の悪い肥溜めのような街だったな」

オーナーがなぜ食事中に話をしなかった理由が分かった気がする。「ゴーレム狩りで一攫千金を狙う貧乏人が大量に移住してきた時代だ。ワシの両親もそんな馬鹿な連中と同類だった」

ゼガスで出会った二人の間で生まれたオーナー。だが、父親は金をことごとく酒代に浪費した末にアルコール中毒で亡くなり、母親は働き先のダイナーで知り合った男とベッドの上で心中してしまつたとのことだった。

「死ぬ間際までいかれた両親だった。そんな惨めな人生は送りたくないと思っていたが、どうやらワシにもその血がしっかり受け継がれていたらしい」

と、自分を皮肉るオーナー。

「何かあつたんですか？」

「イカサマだ」

乱獲によつてゴールドエンゴーレムラッシュに陰りが見え始めたとき、既にゼガスはギャンブルの街となっていた。金ゴールドではなく金マネーの都となつたのだ。

「二、三件でやめておけばよかったものを。当時のワシは、とにかく喉から諸手が出るほど金がほしかった。貧乏でくそつたれな両親と同じ道だけは辿りたくなかったからな。一生遊んで暮らせるだけの金を稼ぎたかった」

始めは上手くいっていたのだろう。だが度が過ぎれば怪しいと思われる。

「薄汚いガキが着飾つたところで、所詮は薄汚いガキに変わりはない。そんな客が大金を持ち歩いていれば嫌でも目立つ。そんな当た

り前のことにも気付かないぐらい、あのときのワシは調子に乗っていた」

まだ十の半ばである彼女にとっては、老人の回顧録にしかすぎないはずだ。けれども話に傾注していた。人が歩んできた道というのは、限られた空間でしか過ごしてこなかった彼女にとって、宝石よりも価値があったからだ。

「ギャングが後ろ盾にいる店に手を出したのが運の尽きだった。顔の形が変わるまでぶん殴られた拳句、最後は剣を突きつけられた。恐怖の中で死を覚悟したのを覚えている。そして――」

曾祖母が颯爽と現れ、ギャングを追い払ったそうなのだ。

「命の恩人ってわけですね」

どうやってギャングを追い払ったかは容易に想像できる。

「ふん、だがワシを助けたあとに、その女は何と言ったと思う」「え？」

何だろうか。足を洗って真面目に働きなさい……ではないはずだ。「イカサマをやるなら、もっと上手くやれ。バレそうになったら、すぐに逃げる、だ」

「それはまた、大おばあ様らしい言葉ですね……はは」「にやりと笑いながらその科白^{せりふ}を告げる曾祖母を想像すると、まったく違和感がない。

「それから、どうなっただんですか？」

「良い筋を持っていると言われてな。頼んでもないのに徹底的にイカサマの技術を教え込まれた。スパルタを通り越して拷問に等しかった。そして気が付いたらいなくなっていたんだ。まるで竜巻みたいな女だったさ」

曾祖母が去ったあと、名を変え顔を変え再びゼガスで稼いだと、若かりし頃を語るオーナーも随分と酔狂だ。ゼガスでトップに上り詰めた男が、実はイカサマでのし上がったと聞けば、カジノの客はどう思うだろうか。

「とても数奇な出会いだっただんですね」

だが気になることはまだあった。

「あの、大おばあ様の話を聞くために戦士さんとマホツカさんを嵌^はめたのですか？」

「ああ、そうだ。取り巻き連中は邪魔だったからな」

わざわざそこまでするとは。事情を話してくれば皆に一言断つて訪ねに行つたのに。

「では、もう解放してくれますよね」

用件は済んだ。ならばもうここにいない必要はないはずだ。

《黄金の爪垢》という存在するか怪しいアイテムを探しに出かけた皆がとても心配である。

「それは駄目だ」

「え！ どうしてですか」

「言つたはずだ。ゼガスはギャンブルの街、全てはゲームによって決定する。奴らはワシが仕掛けた勝負に負けた。その代償はしつかりと払ってもらわなければならん」

「でも、あのポーカーは……」

「ふん、見破られなければ、」

「……イカサマにならない」

曾祖母の口癖だ。

「そういうことだ、なに、明日になれば諦めて戻ってくるだろう。ワシも鬼ではない。泣いて詫びれば、チャラにしてやってもよい」
話はそこで終わった。

オーナーはさすがゼガスで生まれ育つた人だけあり、勝負事に関しては一步も譲らない性格のようだ。

説得を諦めて部屋に戻つた彼女は、再び銀に輝くロザリオを手取る。

母も祖母も家のことで多忙を極めていたため、幼少の頃は曾祖母と最も時間を過ごした彼女。

「この街に訪れることができたのは、ある意味王様に感謝しないのですね」

しかし、大きな問題は残ったままである。

青い月が黄金の街を照らす中、明日に備えて早めにベッドへと潜り込んだ。

??・エンカウント・邪魔・キャンセル

夢って目が覚めた途端に内容を忘れちゃうよね。僧侶ちゃんが出てきたことは覚えているんだけど、話の流れを思い出せない。

まあ、夢の中とはいえ、ウルトラプリティな僧侶ちゃんを拝むことができたから、いつか。これで僧侶ちゃん成分を少しは補充できたはず！

「朝っぱらから何ニヤケ面してんのよ」

マホツカが不審者を咎めるようなジト目^{とが}を向けてくる。おっと、いかんいかん。夢は所詮幻だ。現を抜かして油断している場合ではない。

「（待っているよ、黄金の爪垢！）」

わたしは気合を入れ直す意味を込めてピラミッドの頂点部を見据えた。

「それにしても、随分と変わった食べ物だな」

もぐもぐと口を動かすのは戦士。

ピラミッド攻略に向けてしっかりと朝食を摂らなければならなかったのだが、わたし達はそれほど食料を買い込んでおかなかったのだ。

そこで非常食をたくさん持っている盗賊に分けてもらったわけである。全く持つて至れり尽くせりだね。神様仏様盗賊様だよ。

「携行糧食と同じでライ麦パンのような味かと思ったが、フルーツの甘みがあるな」

盗賊が提供してくれた携帯食料は、さすがは忍者であるといいですか、《兵糧丸^{ひょうろうがん}》という名前通りの丸っこい食べ物だった。

「こっちはカカオっぽい味がするわね」

「近年は購入層拡大のため、様々な味の兵糧丸が販売されているんだ。そちらはフルーツ味で、こちらはチョコレート味だ」

「わたしが食べてるのは？」独特な芳香が口の中で広がる。

「それはライトシナモン味だな」

ぶほつ。ミイラに追われた次の日にシナモンとは、洒落^{しやれ}を効かせすぎだよ……。

「ちなみに、わたしは断然ベジタブル味派だ」

と言いつつ、既に食事を済ませていた盗賊。やっぱ素顔は見られなかったか。

「これから再びピラミッド探索をするわけだが、第三層に出現したあのモンスター群をどうにかしないことには、最上層までは到達できないぞ」

確かに、素通りはできそうにないね。

「外から飛んでいくつてのはどうかしら」

「あの手のダンジョンはズルをしない方が身の為だ。ろくな事にならないぞ」

だよね。未完の冒険小説こと《狩人×狩人》に、トラップだらけの塔を外壁から降りようとして人面鳥に連れ去られちゃうシーンがあつたからね。

「じゃあさ、もう一度透明になるとかは？」

と、盗賊を見る。

「すまないのだが、四人全員を透明にするだけの木の葉がもうないんだ」

なぜ葉っぱが必要なのかは、訊いても教えてくれなさそうだ。植物↓光合成↓酸素↓空気↓空気王？

「マホツカ」

と、ダメもとでマホツカに振る。

「ダメ」

ですか。

まさか一体ずつおびき寄せて戦うわけにもいかないからな。

やばい、行く前からして既に詰んでいるジャマイカ。

「もう、仕方ないわね。透明になる魔法は無理だから、代替としてとっておきのアイテムを使ってあげるわよ」

と、マホツ力はガサゴソといつもの擬音を立てながらローブの中をあさる。

「あつたあつた。えーっと《ディアボロスの香り》よ」

取り出したのは、赤と黒の液体が混在した小ビンだった。

「それは……香水？」

「そうよ。魔法薬品で有名な《G・F・LIMITED》製の特注品よ」

そんな有限会社があるんだ。

「どんな効果があるんだ？」

「ふつ、まさか機械相手に誘惑でもかけるつもりか」

戦士と盗賊が興味深げにビンの中を流動する液体を覗いている。

「ずばり、モンスターを寄せ付けなくする効果があるのよ」

おおつ、それはまさにこの状況を打破するのに打って付けじゃん

———なのだけど、さつきからマホツ力の様子がおかしい。いつもなら「じゃっじゃじゃーん！」とか「ふっふふーん」とか自慢気に見せびらかすのに、今回はそれがない。まさか、記憶障害が発症する副作用があるとか？

「そんな便利なアイテムがあるとは、世界は広いな」

「そうだな。だがしかし、なぜ『ディアボロス』なんだ？」

盗賊のツツコミをマホツ力は聞こえていないのか、なぜか一人物思いに沈む。

「はあ……、何で副賞がこんな微妙な物だったのかしら……」

「どうしたのマホツ力？」

「！ な、何でもないわ、何でも……」

スーパーレアアイテムを手にして珍しく面妖な態度を取るマホツ力。

「どんな香りがするの？ 早く使ってみてよ」

「い、今はダメよ！」

え、何で？

「いや、だって……しょ、食事中じゃない」

食事と言っても丸薬をかじっているだけじゃん。匂いとかあんまり関係ないと思うけど。

「どうしたマホツカ、何を躊躇しているんだ？」

「ぐぐ……、じゃあいくわよ。勇者にシュシュッと」

と、苦渋を嘗めるかのような表情で、香水をわたしに吹き掛けるマホツカ。なぜか手を伸ばして可能な限り離れた位置にいる。しかも鼻までつまんでいた。

もしかして、マホツカってキツイ匂いとか苦手なのだろうか？

しかし香水ですか。山で獲物を探すときに血で匂いをつけた経験は幾度もあるけど、香水などという大人な女のアイテムを使うのは生まれて初めてだな。しかも『ディアボロス』とは、いったいどのような悪魔的な香りが――、

！？

「く――くっさー！！」

うげっ、何じゃこりゃ！？ 鼻がひん曲がる！

「うごっ、ぐはっ、な、何だこの腐乱臭は！？」

「ごわはっ、くさやより酷いぞ」

何なのマホツカ、この強烈な匂い――もとい臭いは！？

「そういうアイテムなの。だから使うの嫌だったのよね……」

鼻をつまんで苦々しい顔をつくるマホツカ。だったら出さないでよ――！

「こ、効果時間は……？」

「ま、まあ……一時間も経てば切れるでしょ」

ま、まじかよ！ し、死ぬ……。

とはいえ、みんなもつけるのだから我慢しよう。

「先頭を歩くアンタにだけ吹き掛ければ効果はバッチリなはずよ」
「なんですとー！？」

「よし、効果が切れる前に行くぞ、勇者」

「そうね、早く歩きなさい。それと風上に立つんじゃないわよ」

「身を犠牲にする精神、実に恐れ入った」

みんなしてわたしから逃げるように距離を取る。
むがー鼻がー！

??・最上層・パスワードは何じゃらホイッ

「もう、死ぬ……」

世の中極暑や極寒の地で命を落とした人はいるわけだけど、古今東西強烈な臭いのせいで事切れた人は、はたしているのだろうか。

しかし、臭いの効果は発揮されたようで、第三層でキカイヘッドと戦闘を交えることはなかった。きっと嗅覚センサーが壊れたに違いない。

それで、次なる第四層は矢印の描かれたタイル張りの、柱や壁が少ないフロアだった。上に乗ると矢印が途切れるまで移動させられる仕掛けによって、正解のルートを発見するまでひたすらフロア内をぐるぐると回る羽目となった。うぶっ、思い出しただけで気持ち悪くなる。

そして第五層は、鋭い槍がびっしりと生えた床を、上に敷かれた透明な板を歩いて渡る危険極まりないフロアだった。さてどうしたものかと思っただけど、戦士が何かの役に立つかもと袋に詰めていた砂漠の砂を撒くことで板の場所を確認することができたのだ。足を踏み外そうには何度かあったけれど、串刺しにはならず済んだ。

それらを乗り越え、ようやくにして最上層へとたどり着くことができたのである。

え、どうして最上層だと分かるかって？

それはね、ご丁寧にも各階層を繋ぐ階段に案内が彫られていたからだよ。

F 5 > F 6 > R

みたいな感じだね。

ちなみに屋上へは第五層から階段がひと繋がりとなっていたので、一応上ってみた。

けれども、四角錐の頂点部には巨大な宝石もガラスの星もなかった。黒い砂の海が展望できる、絶景ポイントだったけど。

「気分は大丈夫か勇者」

大丈夫じゃないっす。

「嗅覚を癒すならば、わたしにまかせろ。盗賊の七香料である《クサツの香り》や《ベツプの香り》を嗅いで中和することができるはずだ」

何ですか、そのいい湯だなゝゝ的な名称は。

心配せずとも大丈夫。マホツカの言ったとおり、臭いはほぼ消えている。

しかし、しばらくわたしの鼻は使い物になりそうにない。これならドリアンだって苦なく食べられそうだ。

貧乏なわたしには縁のなさそうな果物だが、一度アキちゃん家にお泊りしたとき、夕食のデザートで食べたことがあるんだよね。どんな味が気になっていたんだけど、とにかく匂いが凄すぎて鼻をつままないといくまで運べなかった。そのせいか味なんて全然分かんなかったね。アキちゃんのお母さんはムシヤムシヤ食ってたけど。

「いつまで匂い臭い言ってるのよ。早くお宝を手に入れるんでしょ」
元凶のお前が言うてない！

「あとはこの扉の奥を残すだけだな。最後だからこそ一層気を引き締めなければ」

ピラミッドの最上層だけあって、下の階層より明らかに面積が大きい。おそらく今わたし達がいる場所と、扉を挟んだ部屋しかないだろう。

そして進路を阻む扉なのだが、天井まで届いている巨大な鉄扉だった。巨人の家にお邪魔したのか、わたし達が小さくなったのかと錯覚させられるほどである。

当然のことながら押したところで開く気配はミジンコもない。単純に重量のせいだと考えられなくもないけど、この扉も何かしらの仕掛けを解除することで開くはずだ。下の階層が全部そうだったか

らね。

「怪しいのは、この台しかないね」

扉のちよい手前右手側に、オフィスデスクみたいな形状の石机があった。

「ふむ、これが解除スイッチに違いなさそうだな」

と、危険がないか警戒しながら物色する盗賊。

机の上には箱みtainな置物があり、細長いコードがたくさん机と繋がっていた。

「そんなに不安がることないって……………のわっ？」

何の気なしにポンツと机に手を置いたら、いきなり机上の箱——よく見るとプラスチック型の物体——の前面部がブワンと光を灯す。カリカリカリ、ガリガリ、という耳障りな音が鳴り終わると、黒い平面に白い文字が浮かび上がってきた。

「何だこれは？」

「またしても奇天烈な仕掛けだな」

こういう理解不能なものはマホツカ担当だね。

「マホツカ、分かる？」

「懐かしいわね、コンソール画面じゃない」

コンソール？

「それにシーク音なんて久しぶりに聞いたわ」

シーク音？

「しかも最初に表示される文字が『Hello! Pyramid
!』だなんて、随分と洒落が効いてるじゃないの♪」

……………。

「分かる？ 戦士、盗賊」

「無論さっぱりだ」

「魔法使いとは、鵠^{めえ}的な存在だな……………」

ですよ。

「それで、何とかかなりそうな感じ？」

「んー、画面に『パスワードを入力してください』って出力されて

るでしょ。つまりはそーいうことよ」

パスワードですか。

「でもどうやって？ 声で認識するとか？」

「こんな年代物のマシンでバイオ認証システムなんて無理に決まってるでしょ。普通にキーボードを使うのよ」

と、マホツカは机と箱の隙間に収まっていた長方形の板を引っ張り出した。よくそこにあるって分かったね。

「アンタもアルフォンで似た感じのを使っただでしょ。アレよアレ」

ああ、あの文字がジグザグに並んでいる板か。

「でもさ、パスワードって言われましても、全然検討が付かないんだけど」

「何かピラミッド内部にヒントとなりそうな印書きでもあったのだからか」

「こーいのは誕生日とかが定番なのよね。もしくは墓ぬしの命日かしら」

「なるほど、暦か。では試しに、今日の日付を入れてみてはどうだろうか」

とにかく、何かしらのアクションを起こさないと始まらない。とりあえず盗賊案を採用。

わたしは人差し指一本のぎこちない動作でキーボードを押す。するとそれに合わせて時たまノイズが走る画面上に白の文字が並んでいった。

「全部打ち終わったら、最後は『Enter』キーよ」

ほいさ。

ターン！ とわたしは言われるがままに大きめなキーを押した。

さて、結果は……、

『パスワードが違います』

ドゥーン！ という耳に不快を与える効果音が鳴る。やつぱ駄目か。『セキュリティの安全上、残り二回までの入力となります』

なんですか？

「どうすんのこれ？」

「私に助言はできそうにない。勇者に一任する」

「何でもいいから、それっぽいパスワードを捻り出しなさい」

「それしかないようだな。女の勘を信じるしかない」

オンナのカンね……………ん？　そう言えば盗賊って、わたしを女だって分かってたんだ。

そんじゃ、『おとこ』になっても隠し切れないわたしのウーメンパウワで、一発でパスワードを当てちゃおうじゃありませんか！
「きつとこれに違いない、『ギャレット』と」

パチーン！　と最後にエンターキーを押す。さて、結果は――、
『パスワードが全然違います』

んぎゃー！

「どうしてアンタは何の脈絡もない文字列を入力すんのよ」

だってー、オンナのカンがそう告げたんだもん。

『パスワードの入力は残り一回となります。再度の入力はシステム管理者までお問い合わせください』

管理者って、絶対あの世にいるだろ。

うーん、どうしよどうしよ、まじで分かんない。

「思案したところで答えは導き出せないだろう。どうせ無理なら適当に入れるしかあるまい」

確かに。それに失敗しても自力で扉を破壊すればいいだけの話だからね。

あれ？　そっちの方が簡単じゃね？

「ん、何よ？」

いやいやいや、ないないない。無駄な時間と体力は使いたくない。意を決してわたしは最後のチャンスに挑む。

「よし！　だったら最後はアレでいくし――あつ」

と、わたしは操作ミスを犯してしまい、まだ何も入力していないのにエンターキーをペチンと押してしまった。

「ちよ、何やってんのよ！」

やべー、やつちまったー。

もしやペナルティがあったりする？ 落とし穴か？ 岩が追いかけてくるか？ それとも槍が飛び出してくるのか？

『パスワードが入力されました。扉が開きます』

あり？ なんで？ どしって？ はてさて？ まじですか？ （スズナ、スズシロ……）

「もしかして、例の噂は真だったのか」

またですか盗賊さん。

「参考までに、どんな噂なの？」

「ああ、『パスワードが存在しないことがパスワード』という、子供染みた内容なんだ」

何の意地悪問題だよ。

まあいつか。答えは何であれ、聞いたことに変わりはない。

そうこうツツコミを入れているうちに、大扉が左右にスライドし切った。

はたして《黄金の爪垢》はあるのだろうか――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1913x/>

ガールズトークRPG エピソード2/散歩するピラミッドと黄金の爪垢

2011年12月3日14時46分発行